

黒い瞳の同胞 ～イシュヴァール殲滅戦～

リリア・フランチ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

イシュヴァール人はなぜ排斥されなければならなかったのか？

その疑問を胸に少女は戦場を駆ける。

赤と黒を宿した瞳に写るのは。

絶え間なき鮮血と燃え上がる無情な焰だった…。

目次

序章	ある旅路	1
第一話	大総統令	3
第二話	感触	6
第三話	カタナ	11
第四話	抗戦	14
第五話	抵抗の始まり	19
第六話	焰	24
第七話	一矢	29
第八話	戦う理由	35
第九話	犠牲の先に	41
第十話	壊れる心	46
第十一話	循環	51
第十二話	黒い瞳対鷹の眼	55
第十三話	未来へ	61
第十四話	生死の涯て 前	65
第十五話	生死の涯て 後	69
第十六話	黒い瞳の同胞	74
終章	涯てからの始まり	80
外伝	鮮血の道標	
外伝	一話 祈り	86
外伝	二話 戦友	89
外伝	三話 同胞	93
外伝	四話 信頼と約束	97

終章 涯てにあるモノ

第一話 約束の日

第二話 相棒

第三話 前日

第四話 生きる理由と戦う理由

第五話 もう一つの眼

第六話 一つの結末

101

104

108

111

114

119

序章 ある旅路

アメストリス。

広大な砂漠。

そしてシン。

そのシンの東端から海を越えた先にその国はあった。

弓形の島国。これという国名も無かった。

当時その国は長き戦乱の中にあり、幾多の小国に分かれ、この島国独特の戦士「モノノフ」たちが覇権を求めて争っていた。

国が敗れ、滅ぶ。

国が勝ち、大きくなる。

さらにその国が滅び、勝った国が大きくなる。

愚かな戦乱の果てに島国は二つの勢力に絞られ。

そして数年後、島国は統一された。

敗れた国の王族たちはことごとく処刑され、血は残すことなく絶やされ。

永き戦乱の時代はようやく終わりを告げた。

敗れた国の王族は島国の中を逃げ回った。

ほとんどが捕縛、あるいは逃亡の過程で命を落とした。

しかし、一人の男が逃げ延びた。

その男は荒れる海を越え、シンにたどり着く。

シンまではさすがに追手がくるはずもない。

しかし男は病んでいた。

くるはずがない追手の影に脅え、眠れない夜が続く。

やがて疲弊した男は再び逃げ出す。

シンを転々とし。

やがてシンを抜け出し。

砂漠の真ん中、巨体な遺跡群の中でその男は死んだ。

男に従者がいた。

男に付き従う、という使命を失った従者は遺跡群を離れ。

やがてアメストリスの東の交易都市にたどり着く。

そこで行き倒れた従者はある民族の少女に命を救われた。
その少女は赤い瞳に白い髪、そして褐色の肌を持っていた。
やがて従者は少女と恋に落ち、契りを結んだ。
従者はこの場所を終の住処として子孫を残した。
黒き髪、黒き瞳を持った従者は子孫に二つのものを遺した。
ひとつは己が身に付けたモノノフの剣術。
そしてもうひとつは。

己の苦難を写し続けた黒き瞳…。

第一話 大總統令

暑い。

暑い。

…ほんとに暑い。

まあ当たり前か。砂漠の真ん中にいるんだから。

数週間前まで居たシンは涼しいところだった。同じ世界なのになんでこんなに違うんだろう？

そんなくだらないこと考えていたら父さんが話しかけてきた。

「どうした」

「…なんでもない。ちよつと考え事してただけ」

「…ふん」

さつきと先に進む。これだけ無愛想なのによく行商人なんてできるわね。

「もうすぐアメストリスよ。がんばって」

母さんがいなけりや商売成り立たないわけよね。

母さんの苦勞がわかるわ。

私の名前はスズ。スズ・モノノフ。

もつともアメストリスでは「スズ」「モノノフ」は発音しにくいので「スー・モヌウフ」と呼ばれてる。なんでこんな珍妙な名前なのかは…追々。

私はかなり複雑な混血の血筋だ。父さんは生粋のイシユヴァール人で行商人をしている。母さんはアメストリスとシンと…東洋の島国の民族との混血。

そんな私には様々な血が表れている。

薄い栗色の髪は父さんの白髪と母さんの茶髪の間。

白い肌はアメストリス人のおばあちゃんから。

そして…。

右の赤眼はイシユヴァール。

左の黒眼は東洋の島国。

世にも珍しい黒赤妖眼。

そんなのが私、スー・モヌウフだ。

しばらくすると蜃気楼かと思えるような街並みが見えてくる。東の果ての街ユースウエル。そこからさらに南に行つたところにあるのが私の故郷、サンドウォール。

東の大国シンとの交易の拠点と言われてる砂漠に面した街。

とはいえ鉄道が埋もれてしまった現在、たまたに砂漠を越えてくるキャラバン相手のみでは、ね。

交易の拠点なんて今では名ばかりだ。

街に近づくとたびに込み上げてくる懐かしさ。

それと同時に感じる不安。

いまアメリクスでは大きな内乱が起きている。

アメリクス人とイシュヴァール人は見た目も文化もかなりの違いがある。当然折り合いも悪く、何かと争いが絶えなかった。

そんな時、アメリクス人の将校が誤ってイシュヴァール人の子供を射殺してしまう事件が起きた。

両民族の関係は一気に悪化し、内乱へと発展したのだ。

それを伝え聞いた父さんはすぐ帰国を決意した。

父さんはイシュヴァール人の中で穏健派の筆頭として知られている。今回の帰国が内乱を止める為だということとは私でもわかっていて。だから3年前から剣術の修行の為にシンに留学していた私も帰国することにしたのだ。

私の一族は東洋の島国が源流の独特な剣術を受け継いでいる。母さんは興味が無かったらしいけど私は四歳くらいから師匠でもある大爺様から剣術を学んでいる。

その修行の一環としてシンで「相手の気配を探る術」とやらを身に付けるよう言われたのだ。何の役にたつのかわからないけど…。

3年振りのサンドウォールはさらに寂れた気がした。

あれだけ賑やかだった市場も現在は閑散としている。建物に人の気配もないようだ。

代わりに増えたのは瓦礫と弾痕。この街も戦場となっていたのだ。

しばらく進むと父さんが誰かと話していた。

私も少し覚えてる。確か父さんと昔一緒に商売してた人だ…。

「…いいから早くここから離れろ」

「まて。まて。まて。まて。まだ間に合うだろう」

「無理だ。アメストリスの奴ら、もう…」

そんな会話が聞こえるなか、とてつもない轟音が響いた。

私たちのすぐ横の建物が突然爆発したのだ。

さらに続く轟音。それが戦車によるものだったことを知ったのは

随分後だ。

「アメストリスの奴らだ！」

「…！」

「あいつが…ブラッドレイが…大総統令を」

大総統…令？

「あの…何それ？」

「…君は？」

「スーです。スー・モヌウフ」

「ああ、娘さんか…大きくなつたなあ」

感慨深く私を見つめてる…じゃなくて！

「あの、それよりも」

「ん？…あ、大総統令か」

私は頷いた。ある嫌な予感を胸に。

「大総統令3066号。つまりイシユヴァール人殲滅を命令したん

だ」

私の嫌な予感。

それはイシユヴァール人の危機。

そして。

私自身の運命の転換。

先に見えてくるのは鮮血の道のり。

これが、その始まりだった。

第二話 感觸

激しい砲撃が続く。

私は近くにいた母さんの腕を掴んで建物から離れた。

「父さんは!？」

「反対方向へ逃げてたわ」

私たちが街に入った場所ね。

「私たちも行こう」

まずは父さんと合流。そしてサンドウォールから脱出する。

先のことはそれからだ。

そう考えて走りだした瞬間。

私のすぐ近くで空気が震えた。

「母さん伏せて!」

そう叫ぶのが精一杯だった。

何か熱いものを頬に感じたあと、世界が暗転した。

……。

……うっ……。

ここ……ここは……。

確か……サンドウォールに……帰ってきて……。

……。

……。

……。

そうだ。

私はあの時母さんと……。

「……母さん!」

繋いでいたはずの手。掴んだのは瓦礫の一部だった。

身体の痛みも忘れて跳ね起きる。

……辺りには母さんの姿はない。あるのは瓦礫の山だけだ。

「母さん……」

と叫びかけて口をつぐむ。ここはもう戦場だ。どこに敵がいるか

分からないのだ…。

身を低くして辺りの気配を探りながら母さんを探すしかなかった。身体を動かしながら自分の怪我の具合も把握する。

多少かすり傷がある程度で身体を動かすにはまったく支障はない。少し安心しつつ母さんを探した。

「…母さん…」

母さんは生きていた。

ただ、重傷だった。

特に肩と脇腹の切り傷が深い。出血もひどい。このままでは…。

「すぐ父さんと呼んでくるから！待ってて！」

意識の無い母さんに叫ぶ。

もう躊躇していられない。瓦礫を駆け上がって父さんの姿を探す。敵に見つかるかもしれない。だけど叫ぶ。

何をすればいいかもわからない。ただ父さんがいればなんとかする、。

ただ混乱する自分を抑え、狂いたくなる自分を諫める。

この時の私にできたことは父さんを探して走り回ることだけだった。

どれくらい探したのだろう。

そんなことがわからなくなるくらい走り続けた。

日が傾いて暗くなってきたのか煙で周りが煤けていたのか、あたりが暗くかんじる。

そんな中。

父さんだったモノを見つけた。

……。

……。

…不思議だ。

声もでない。涙もでない。

ただ…何かが砕けた気がした。

「……」
何にも感じない。

これが15年付き合った父親との別れなのに。

「……」
私は父さんの髪に触れた。

よく考えれば父さんを下に見たのはいつ以来だろう。

そんな馬鹿な考えを振り払う。

今はただ、父さんの「感触」を頭に刻み続けた。

しばらく座り込んでいた。

でも母さんを思い出して立ち上がる。

どうしようもできない。

ただ絶望感を引き摺って歩く。

走る気力もない。

ただ歩く。

「……！」
ふいに意識がはつきりした。

私が行く先に数人の気配。

多分アメストリスの兵士だろう。イシュヴァール人とは何かが違う。

何かを取り囲んでいるみたいだ。何か大声で叫んでいる。

どうやら意識があるか確認しているらしい。

そんなことを考えていると、さつき見たのと同じ瓦礫を見つけた。

これは…私が掴んでいた瓦礫。

ここは…私が気絶していた場所。

「……………」
まさか！あれは！

必死に走る！お願い、お願い！

そして。私は。

母さんの胸に剣を突き立てる兵士を見た。

完全に壊れた。

理性も消えた。

偶然にもすぐ近くに軍刀がある。

それを持つ。

走る。

飛び上がる。

振り降ろす。

：二つに分断する。

そういえば大爺様が言っていた。

剣を振るう者にとって一番大切な資質とは。

それは剣が肉を斬り骨を断ち命を刈る「感触」を快感とするか不快とするか、だと。

：私には：資質があつた…。

二つになりかけたそれを蹴り飛ばす。二の太刀でもう一人を薙ぐ。

最後にもう一人の喉を突く。

初めて人を斬った。

その苦痛など問題ではない。

この心の渇き。

この心の餓え。

大切な人を護れなかった痛み。

大切な人を奪われた悲しさ。

もっと大きな受け入れ難い事実がある。

どうすればいい。どうすればいい。

：わからない。

気がつけば。

雨が降っていた。

砂漠に近いこの街には珍しい雨だった。

この頬に伝う「感触」

雨の雫なのか。

涙なのか。

それとも。
血なのか。

第三話 カタナ

夕方近くになったと思う。

あれから父さんと母さんを埋葬して簡単なお墓もつくった。

「ごめんね…」

いろいろ言いたかったのに、出てきた言葉はそれだけだった。

シンから帰って故郷に戻って懐かしい人達と出会って…思い描いていた帰郷はあまりにも残酷に切り裂かれた。

いろんな思いが頭の中をぐるぐる回る。なんだか急に込み上げてきた私は…。

……………。

お墓の前でしばらく時間を過ごした。

落ち着くと私は街を脱出するために行動を開始した。

暗くなってきた分かった。

街は包囲網が解かれ始めている。夜営の灯が街の交通の要所にしかないのだ。

これなら川から…いや砂漠を迂回すれば…。

考えを巡らせていると自然とそこにいた。

「こんなことになっても…覚えてたわ」

完膚無きまでに破壊された自宅。例えば3年間不在であったとしても体はしっかりと場所を記憶していた。

「何か無事なものは…」

どうせ来るつもりだったし。何かめぼしい物はないか、と瓦礫に足を踏み入れた。

「こんなもんかな」

探してみると多少は形が残ったものもあった。

父さんや母さんの形見になりそうな物もあった。そろそろ街を出よう…。

カツン

「…っ」

何か引つ掛かった。下を見ると黒っぽい棒状のものが埋まってい

る。

「……………」

正直そのまま行こうと思ってた。ただし気晴らしがしたかった私はその黒っぽいものを蹴飛ばしてから先に進もうと思った。

ガギン

金属音。

しかも普通のものじゃない。相当硬いものだ。

気になった私は黒っぽいものを手にとってみた。

ボロりと崩れた炭の先に。

光があった。

それは一振りのサーベルだった。あれだけの猛火に晒されていたのに、その輝きには全く曇りが無い。見事な輝きを保っていた。

「これは…カタナ…」

これはサーベルの一種だと伝えられている。いわゆる家宝だ。

鞘は半分以上焼けてしまっただけで使い物にならない。カタナ自体は無事だ。

「使い物になるのかな」

正直興味も無く今まで忘れていたようなものだ。

父さんや大爺様が自慢話をするために持ち出してきた、くらいしか記憶がない。

確か…斬れない物は無いとか。決して折れず、刃毀れもしないとか。

「まさかね」

この時も気晴らしの一環、という気分だった。

このサーベルを思いきり瓦礫に叩きつけて折ってやろう、と思っていた。

カタナを持って構える。

精神統一。

「…はあ…」

一瞬で気合いを放ち袈裟斬りにカタナを振り下ろす。

鈍い感触。

バキイン！という金属が碎ける音。
ではなく。

真つ二つになって崩れる瓦礫の鈍い音が響いた。

正直唾然とした。

話半分でしか聞いてなかった父さん達の自慢話がまさか本当だったなんて。

よくよく見てみれば刃毀れもしていない。

本当に見事な一振りだった。

「…偶然…なのかな」

たまたま引つ掛かったものが…なんてね。よくある英雄物語くらいでしかあり得ないと思ってた。

「……………」

このカタナには意思がある。師匠でもある大爺様がよく言ってた。物に意思が宿るなんて考え方、シンの一部くらいでしか信じられない迷信だ。

でも今の私には…信じられる。

ズズン…

何かが破裂する音が響いた。まずい、アメストリス軍だ！

とりあえずカタナに自分の外套を巻きつけると、私はその場を駆け出した。

それから1時間後。

私が街を離れるのと同時刻。

大爺様や数人の武僧が立て込もっていた役所が陥落し。

サンドウオールはアメストリス軍に占領された。

第四話 抗戦

脱出した私は一時的に近くの岩山で様子を見た。

2〜3日アメリリス軍の動向を伺ってみたけど…どうやら動く気配はない。

このまま進駐するつもりらしい。一度戻りたかったけど…仕方ない。

数日の間にかき集めた食糧や必需品を革袋に放り込むと、アメリリス軍に見付からないよう岩山から離れた。

「バイバイ…サンドウォール」

…かならず…戻るよ。

それから数日間、サンドウォールの近くの集落を転々とした。だけどほとんどは攻撃を受けた後だった。

相手は軍隊。武僧ぐらいじやなきや抵抗もできない。

惨たらしく殺されたイシュヴァール人（特に子供）を見る度…自分に何か…今までにない感情が湧いてくるのを感じていた。

そして。

サンドウォールを脱出してから1週間。

私は父さんの知り合いの家に転がりこんだ。

その家は元々宿屋を営んでいた家で、父さんがよく使ってた。で、私も面識があったのだ。

なんとと言っても私の外見。アメリリス人と間違えられるのもいつもの事。

その度重なる面倒を思うと知り合いというのは有り難かった。

「んぐ、んぐ…ぷはー、うまい」

「これこれ。こんな綺麗な女の子が…はしたないよ」

おばさんに限らずイシュヴァール人は敬虔なイシュヴァラ教徒だ。結構うるさい。

「ごめんなさい…久々のお水だから」

私は不真面目なイシュヴァラ教徒なんです…。

「それにしてもよく無事で…」

「うん…でも父さんと母さんは…」

「…そうかい…」

私の話を聞いたお婆さんはイシユヴアラ教の弔いの言霊を唱えてくれた。

「ありがとう」

「それにしてもアメストリス人の奴らめ…天罰が下ればいいのさ」

その言葉を聞いて、肝心なことを思い出した。

「そういえば。アメストリス軍の情報聞いてない？」

「聞いているよ。あと数日中にはこの辺りに達するらしいね」

「早く脱出しないと」

「心配しなさんな。ちゃんと準備はしてるさ」

近くの荷物を指差してニタつと笑う。やっぱりお婆さんは頼もしい。

「今夜は泊まっていきな。なんなら私らと来るかい？」

願ってもない。私は好意に甘えることにした。

久々に浸かる湯船の気持ち良いこと…生き返るよく。

「……………」

だけど…父さんと母さんはもういない。

久々に緊張感から解放されると…感じる喪失感。哀しみ。悔し涙しか出てこない。

そして…沸々と沸き上がる殺意。

ここ数日、私の内を徐々に埋めていく黒々とした憎悪。

アメストリス人を切り裂いた感触が全身に伝わる。

「……………」

それを快感としか感じられない自分が怖かった。

濡れた髪を拭いていると外で物音が聞こえた。

…覗き？

急いで下着を身に付けて近くに立て掛けてあったカタナを握る。

裏窓を伺おうとしたとき、扉が荒々しく開いた。

「スーちゃん！急いで支度しな！」

お婆さんが血相を変えて怒鳴った。

「!…まさかアメリストリス軍が!？」

「斥候の連中がこの辺りに来てるらしいんだ！」

私は着替えながら気配を探る。

…近くに数人の気配。不味い！アメリストリス人だ！

「おばさん！隠れて！」

そう叫ぶと急いで伏せる。

瞬間、銃声が轟いた。

数分後。

銃声が止んだ。

さっきまで平和な日常だった空間は一気に黒々とした戦場に変わった。

「…一体なんだってんだい！」

おばさんが毒づく。

「とりあえず物陰にいて」

「スーちゃん？」

私はカタナを握る。またあの「感触」が全身を駆け回る。

何故か笑みが浮かぶ。やっぱり私…変だ。

だけど…。

「……………」

おばさんが何か叫んだ気がした。だけど私は飛びだした。

一気に詰め寄ると一閃。

肩口から脇腹まで切り下げる。

血を吹き上げる兵士を横目に隣にいた中年の胸に一突き。よし、2

人目。

建物の陰に2人の気配。銃声！

横飛びに避ける。1、2発カタナで弾く。火花が散った。

驚愕の表情を浮かべるアメリストリス人。そりゃそうか。銃弾を剣で弾くなんて普通は無理よね。

…大爺様が私をシンに留学させた理由がようやく解った。

シンでの先生だったフー爺様が言っていた。

「気配とは人の存在。つまりは空気の流れ。人が動けば空気も動く。

その流れを全身で感じることにじゃ」

修行の相手をしてくれたランファンの言葉も浮かぶ。

「…太刀筋を見ていては駄目。見えたら斬られる。見る前に避けること」

当時はムチャダ!と思った。でも、今なら…!

「…遅い!」

そう呟いてまた1人切り裂く。

残りは1人。若いアメストリス人だ。

私を見てガタガタ震えていた。

「た…頼む…命だけは…」

涙を流して私に懇願している。私はすう、と眼を細めると。

「あなたにはイシユヴァアの慈悲は必要ない」

カタナを振り上げる。

「あの世で我が同胞に詫びなさい!」

アメストリス人は2つに分かれて倒れた。

カタナの血をアメストリス軍の軍服で拭う。

緊張を解く…。

が、束の間!後ろに1人!

カタナを向けた先には。

おばさんがいた。

「…おばさん!危ないよ!」

「び、びっくりしたよ…アンタ、強いんだね」

内心ホツとした。

ちやんとアメストリス人とイシユヴァール人の気配の違いが解ること。

そして…おばさんが私を見る目が変わっていないこと。

「とりあえずここから逃げよう」

「そうだね。急いで仲間を集めるよ」

しばらくして数十人のイシユヴァール人が集まる。

大半が民間人。だけど大丈夫。

武僧もいるし、私がいる。

絶対にこの人達を死なせない。

そのかわりに。アメストリス人を死なせる。

イシユヴァラの慈悲の及ばない暗闇に落としてやる…。

私たちはアメストリス軍の本隊が到着する前に脱出した。

数回の戦闘があったけど死者は出なかった。

そして私たちは大僧正の元へ向かった。

第五話 抵抗の始まり

私達は他の地区や都市から集まってくる人達と合流しながら進んだ。

目指すはグンジャ。あそこなら昔からの防壁もあるし食糧も豊富だ。

そこでアメストリス軍本隊を叩く。

グンジャまであと数日のところで武僧の集団と合流した。西側の寺院に詰めていたそうだけど、急な知らせを聞いて駆けつけたそうだ。

その中の1人が私を見て叫んだ。

「おい！なんでアメストリスの女が混じっているんだ！」

やっぱり…と思いつつ私は答えた。

「私は混血です。父は生粋のイシュヴァール人でした」

「なら母親がアメストリス人か？」

思わず深い溜め息がでる。

「…違います」

「ふん。何が混じってるかわかったもんじやないな」

「ここ数日間の疲れもあった。少し苛ついていました私は。」

「うるさいわね。その敵つい顔切り刻んでやろうか」

思わずカタナに手をかけた。

「……………」

敵つい武僧も表情を消した。こいつ、強い…。

お互い構えたまま、ジリジリと間合いを詰める。

「やめぬか！同じ民族同士争うでない！」

武僧の師父らしい老人に止められた。ようやく冷静になった私はカタナを退いた。

殺すのはアメストリス人だけだって誓ったばかりなのに…。

敵つい武僧のおっさんも私を一瞥してから退いた。

それからの道中はお互い会話することもなく。

とりあえずは無事にグンジャまで到着した。

けど…。

グン ज्याは半分以上を占領されていた。

私たちは一般人をさらに奥地に逃がしてから戦線に加わることでなり（ここでまた厳ついおっさんと一騒動あったけど割合する）さらに1日を浪費した。

グン ज्याはさらに厳しい状態に追い込まれていた…。

私たちは街の北側にいる。

戦力は私を入れても33名。人数的には圧倒的に不利。だけどイシュヴァールが得意とするゲリラ戦法ならば話は別。この少人数が逆に生きてくる。

「とりあえずは2人1組で移動するように」

師父を戦力に入れられない。32名。

それぞれ知り合いの武僧達が組んで消えていく。

そして。最後に残ったのは。

「……………」

「……………なんでよ」

一瞬イシュヴァラの神を斬り捨てたくなった。

お互い無言で戦場を駆ける。

2つ先の建物に人の気配。アメストリス人だ！

「ちよつと待って」

「…なんだ」

「あの大きい建物にアメストリス軍がいるわ」

訝しげに建物を睨む武僧。

「…何で解る」

「気配」

私を睨み付けた。

「シンの気配を読む術か？」

「…そう」

「テメエ、シンの人間か」

「……………」

1から説明するのも面倒くさい。

「そう」

「…あそこは多民族国家だからな」

扉に目を向ける。

「前からは厳しい。2階にこいつを放り込む」

手にしているのは…炸裂弾。シン製。

「お嬢ちゃんはそこで見てろ」

そう毒づいて走り出す。

「おっさんは引退しなよ」

私も走り出した。

建物内で爆発。中の人間は堪らず外に逃げ出す。

つまりは敵自ら飛び出してきてくれる訳で。

易々と私は3人ほど斬り倒した。

1人を組み倒したおっさんが目を剥いている。

中から2人出てくる。まずは1人の喉を薙ぐ。頭を半ば失って倒れる。

その身体を盾にしながらも1人の腹に…あれ？

予想した感触が無い。となりでアメリストリス人が顔を素手で碎かれていた。

「邪魔するな！」

「…女が言う台詞か！」

そんな会話をしながら私は室内に炸裂弾を放り込む。

素早く建物から離れる。建物が轟音をたてて崩れたのはすぐ後だった。

私たちのゲリラ戦法は確実に成果を挙げていた。

アメリストリス軍が警戒して街から後退しはじめている。

私はさらに最前線に進む。ついてきたおっさんが私に話しかけてきた。

「何であそこまで戦い慣れている？」

「シンで散々戦い方を叩き込まれた」

ランファンに火薬の扱いまで教えてもらった。まさか役に立つなんて思ってたけど。

「…世も末だ」

「何か言った？」

「嫁には行けねえつと言った」

「うるさい！」

気にしてるのに！

しばらくすると小屋があった。異様に警戒されている。何かある。

「お偉いさんがいるらしいな」

「……………」

小屋を警備している兵を入れても…20名くらい。アンテナみたいなものも見えないから…。

「指令部？」

「可能性はあるな」

ならば話は簡単。

私は一気に走り出す。

正面からアメストリス軍を突つきる。

小屋の前にいた兵士を袈裟斬り。目があった兵士を蹴倒し。

小屋の中に炸裂弾を…。

あ。無い。

しまった！さっきので最後だ！

本気で焦る。これじゃ「殺して」と言ってるようなものだよ！

周りのアメストリス人の目が私に集まる。

そして。

閃光が煌めいた。

いきなり視界を奪われて狼狽しつつも気配を探る。

イシユヴァール人の気配が駆け寄ってくる。私を抱えあげ…どこ

触ってるのよ！

何かを放り込む音。一気に走り出す。舌を嚙んだ。

背後で小屋が爆発した。

「お前は阿呆だ」

う。何も言い返せない。

「…ごめんなさい」

「しかし。その阿呆のおかげで隙ができた。指令部を潰すことができた」

そう。本当に予想外の成果だった。

「俺も礼を言わねばならないな」

少し驚いた。てつきり怒鳴られるとばかり…。

「いい感触だった」

？

「結構あるじゃないか。着痩せするタイプか」

咄嗟に胸を隠す。

「…斬る！」

カタナを握りしめた頃には、あのおっさんは姿を消していた。

グン ज्याを制圧しかけていたアメストリス軍は初めて準将クラス
の戦死者を出し。

動揺の中、一時的にグン ज्याから撤退した。

イシユヴァール人にとっては久々の勝利だった。

しかし。

私たちはまだ知らなかった。

「人間兵器」を。

国家錬金術師の存在を。

第六話 焰

グン ज्याを取り戻した。

その噂はイシユヴァールに広がり、次第に人員が集結し始めた。

正直、数週間前の劣勢が嘘のようだ。

それだけ、あの勝利の意味は大きかった。

私はいま夜のグン ज्याを歩いている。

イシユヴァアラ教の武僧が中心となって夜の警備を行っているんだけど。

なぜか私もそのメンバーに入ってしまったている。そうだ、あの皆さんが余計なことを言ったのだ！

でも…これでいい、とも思う。私は自分でいうのも変だけど。

じつと待つのは苦手だ。

敵が…アメストリス軍が近くににいるのなら。

私も少しでもそばにいたい。

1人でも多くのアメストリス人の血を流したい。

…私は最近、普通にこう考えるようになっていた。

人を斬る、という行為が日常になっている。

イシユヴァールの為、という免罪符を掲げてアメストリス人を殺している。

理由があろうと無かろうと。

殺人は殺人。

罪は罪。

…そんな当たり前のことも忘れていた。

今夜は満月。

夜襲がある可能性も十分あるのだ。

何百年と経った古い城壁の穴から辺りを警戒する。

「……………」

深い沈黙が周りを支配してる。気配を探っても…せいぜいネズミがうろろろしている程度だ。

不意に眠気が襲い、我慢しきれず欠伸をする。

やばい…ホントに眠い。

仕方ない…少し夜風に当たってこよう。

「少し出てくる。辺りを見回ってくるわ」

「気を付けてな」

ペアを組んでいた武僧に一言告げてから下へ降りる。

城壁を出てグンジャから少し離れた井戸へ向かった。

歩くこと数分。

目的の井戸に着く頃。

少し離れた壁越しに人の気配を感じた。

これは…アメストリス人！

2人いる。斥候かもしれない。私はアメストリス人に気付かれな

いよう壁に忍び寄った。

壁越しに数メートルの距離。よし、気付かれない！

カタナを握りしめ、一気に壁を…。

「…まさか…みが…」

飛び越えようとしたけど…止まる。

よく注意してみれば…1人は女の人。

「私は…マ…ング…」

「仕方…い…」

声は小さいけど、雰囲気でわかる。

どうも痴話喧嘩っぽい。

(…バカバカしい)

小さく溜め息を吐く。戦意を無くした私はさっさと離れようと

思った。

しかし。ふと気付く。

(…こんな場所に一般人がいるわけ無い)

ならば軍の関係者。ほうかっておけば後々厄介だ。

「……わかりました」

その時、会話が途切れた。女の人らしき気配が足早に離れた。

やった。これはチャンス。

しばらく待って女の人に戻ってくる様子が無い事を確かめる。

そして再びカタナを握りしめ。
壁を飛び越えた。

軽い着地音。

そこにいたアメストリス人が驚いて振り向く。

「…驚いた。この私に気配を悟らせないとは」

黒髪に黒い瞳。そしてこの軍服。間違いない、アメストリス人だ！

「君のような美しい女性に待ち伏せされるのも良いものだ」

場違いな台詞を吐くアメストリス人。大胆なのか余裕があるのか…。

何となく悪乗りしてみたくなつた私は返答することにした。

「私もあなたみたい魅力的な男性を探してたのよ」

叩き斬るのに最適な男性をね。

「それはありがたい」

少し笑みを浮かべるアメストリス人。う、結構良い面だわ…。

「しかし。立ち聞きされるのはあまり良い気分ではないな」

「あらそう。あなた達アメストリス人が良い気分になる必要無い」

「…君はイシユヴァールの」

一気に踏み込む！

「ふっ！」

横にカタナを薙ぐ！

殺った。と思った。

しかし。

「…：…速いな」

避けられた。

嘘。渾身の一撃だったのに。

でも、そんな事でシヨックを受けてる場合じゃない。

ならば連撃で仕留める！

後ろへ飛び退いたアメストリス人を追う。

アメストリス人は何か模様のついた手袋を着ける。

「…無駄な事を！」

気にもせずカタナを振り下ろす。

その時。

目の前に火花が散った。

何故か解らなかった。

けど。

死ぬ。

確実に死ぬ。

そんな恐怖が全身を駆け巡り。

私は火花から急いで離れた。

轟く爆音。

つい数秒前まで私がいた場所は。

とてつもない炎に包まれていた。

何？

何が起きたの？

場所も忘れて混乱する私。

あり得ない。

こんなの普通じゃない。

魔法でも使わない限り何も無い空間に炎なんて…。

………。

魔法？

………。

………。

………。

確か…シンで…。

変な円を描いて…妙な術を使う…。

「ほう。避けたか」

アメストリス人が呟く。

「私の焰を避けたのは君がはじめてだ」

…。

そうだ！練丹術だ！

「あなたは…練丹術師？」

「練丹術？…ああ、シンの錬金術だな」

錬金…術。

「君は国家錬金術師を知っているかね」
国家錬金術師？

「…知らない」

何故か苦笑い。

「軍の狗だ」

笑っていたアメストリス人がふつと無表情になる。

「その狗がイシュヴァールに派遣されたのだ」

バチン、と指を鳴らす。

私の近くの壁が爆発した。

「…!!」

まともに爆風を受けた私は後ろへ吹っ飛んだ。

何よ、これ？

こんなの直撃したら…!!

「今は見逃そう。しかし」

さつと歩き始めるアメストリス人。

「今度逢ったときは容赦無く…焼く」

振り返った瞳。

それは人殺しの瞳。

「早くイシュヴァールから離れろ」

そして去っていった。

私はしばらく茫然としていた。

寒いくらいの気温なのに。

…汗でびっしょりだった。

次の日。

グンジャはわずか半日で陥落した。

たった1人の男によって。

無情な焰を操るあの男。

国家錬金術師によって。

第七話 一矢

グンジャが陥落した。

あの国家錬金術師が1人で。

そう、たった1人で。

グンジャを守っていた武僧の7割が戦死。

戦いに参加していた一般人の義勇兵にもかなりの被害がでた。

：はつきり言っちゃえば完全に勝敗は決まったようなものだ。

私個人的には納得いかない。だけど「これ以上犠牲者を出すよりは

…」という意見が多いのも事実。

私もちよつとだけ諦めを感じ始めていた。

だけど。

まだ終わらない。

何故なら。

イシユヴァール「殲滅」戦なのだから…。

グンジャから落ち延びて逃げ回る人達にもアメストリス人は一切容赦をしなかった。

本当に、殲滅。

突然現れた壁に行く手を阻まれ、背後から銃弾を浴びせられる。

決死の覚悟で挑んでも突然の爆発によって吹っ飛ばされる。

大人子供男女一切関係無し。

イシユヴァール人とわかれば殺される。

：地獄だった。

で、私はというと。

まだ戦っていた。

この時の私には「戦う理由」なんて大それたモノは一切無かった。

ただ、殺す。

憎いから殺す。

アメストリス人だから殺す。

：この時の私はひどい眼をしていたんだと思う。

本当に、ひたすら。

アメストリス人兵士を惨殺していた。

いま、私は聖地の中心の西側にいる。

アメストリス人が勝手に「西区」などと呼んでいるあたりだ。

ここには比較的大火力を持つ国家錬金術師がいない。

だから私や生き延びた武僧はここで戦線を維持していた。

銃弾を避けて正面から斬り込む。

ライフルを手にした兵士を2、3人斬り捨てる。

その後、左右から武僧が飛び込んでアメストリス陣営を混乱させる。

あちこちで悲鳴をあげるアメストリス人。

武僧によつて首を折られる。

私は死んだ兵士が持っていた手投げ弾の安全ピンを抜き、放り込む。

一斉にイシユヴァール人は離脱。

アメストリス軍は爆破によつて更なる混乱に陥った。

とりあえず夕方になり、戦闘も小康状態になった。

私は前線から離れて北に向かった。

そこにイシユヴァール人の生き残りが集まる集落があるのだ。

「スー姉ちゃん、お帰り」

「今日はどうだった？」

「勝ったの？・ねえー」

この子供達はみんな親無し。殲滅戦で両親をアメストリス軍に殺された子ばかり。

つまり、私と同じ。

なんだか気があったというか…今では「お姉ちゃん」になつてる。

「はいはい。みんな早く寝なさいよー」

そんな会話をしながらも…感じる視線。

…大人達が私をどう見てるかは私もわかっている。

容姿だけ見ればほぼアメストリス人の私。憎しみの対象とされることも多い。

前線に立ってアメストリス軍と戦っている事実が無ければここには居られないだろう。

実際に石を投げられたり罵声を浴びせられることもしばしばあった。

「よう、混血」

少し落ち込み気味だった気分がさらに悪化した。

そう。あの武僧のおっさんも生き延びているのだ。

「何よ、おっさん」

「西側はどうだ」

「…一進一退ね」

「そうか…こっちは散々だよ」

…はつきり言っていてイシユヴァールはいま劣勢だ。

「おっさんが足引つ張ってんじやないの」

「お前こそ足引つ張ってんじやねえのか」

私の顔を見ていたおっさんの視線が下がり。

「…こんなこと言ってる場合じゃねえな」

ふっと息をついた。

「…何よ」

「お前がいるところに明日あたり国家錬金術師がくるらしい」

国家錬金術師が…くる。

あのおっさんは口は悪いけど情報は的確だ。

「……………」

何となく考え込んでいると、目の前に誰かがいた。

「…スー」

「…ん？」

イリージャ。私と同じ親無し。2つ下だ。

「俺も戦場に出たい」

「…またその話？ 師父には聞いたの？」

「ダメだダメだの繰り返し」

そりやそうよ。

「なら諦めなさい」

「嫌だよ。俺だってアメ野郎をぶっ殺したい」

「師父の決定は絶対よ」

「なあ、スー。俺も連れてってくれよ。頼むよ」
小さく溜め息をはいて。

「ダメー！」

と一喝。その場を離れた。

…気になる。けど。

振り向いたらダメ。

ただスタスタと歩く。
すると。

後ろから私の胸を鷲掴みする手。

思わず悲鳴をあげてしまった。

そして逃げる足音。

「イリージャ…いつか泣かす」

思わずイシユヴァアラに誓ってしまった。

次の日。

あのおっさんが言っていたとおり、国家錬金術師が現れた。

一気に戦線は後退。

私が来た時にはイシユヴァール側は全滅しかかっていた。

私が降り立った辺りには何故か無数の剣が突き立っていた。

そして無数に転がる武器の類い。

「ほっほ。また現れおったわ」

目の前にアメストリス人がいる。白髭を生やした老人だ。

「この銀の錬金術師ジョリオ・コマンチに戦いを挑む愚か者がまた現れおったわ」

手を地面につける。何か光が…？

「女子供としてイシユヴァール人ならば容赦はせぬ！」

突然無数の飛剣が私を襲った。

不意に横跳びに避ける。

危なかった。

…これが奴の錬金術！

「ほっほ。避けよったわ」

何かおかしいのか、常時ニタニタしている。

…気持ち悪い！

「いま斬り捨ててやるわ！そこを動くな！」

錬金術が途切れた瞬間を狙って一気に間合いを詰める。

兜割り！

が、弾かれる。

「剣と剣の勝負。それも一興」

錬金術師はいつの間にか剣を握っていた。

そのまま接近戦に持ち込む。

剣での戦いは明らかに私が有利だった。

数撃の後、相手の剣を弾き飛ばす！

よし、殺った！

「おのれえー！」

また何かの光。無数の槍が私に殺到する。

「……………」

血が迸った。

迂闊だった。

不意打ちとはいえ、足に手傷を負った。

これでは満足には戦えない…！

「ほっほ。このジョリオ・コマンチを追い詰めるとは」

相変わらずニタニタしながら近づいてくる。

「しかし惜しかったな」

私の目の前にきて、剣を振り上げる。

私は眼を瞑った。

……………。

……………。

…あれ？

…私…生きてる？

ふっと眼を開ける。

そこには。

「う、うがああ！お、おのれえええ！」

左足から大量の出血をして蹲る錬金術師と。

「へ、へへ…アメ野郎に…一矢報いて…やったぜ…」

口から血を吐いて倒れるイリージャがいた。

第八話 戦う理由

「…イリージャ！」

目の前の光景がスローモーションになった。

飛び散る血流。傾く体。

私は痛む足を忘れてイリージャを抱き止めた。

腹を貫いた剣が血に濡れている。このままだと…。

とにかくここを離れないと！

「まて！またぬかあー！」

…！

…もういい。

いまは錬金術師なんかどうでもいい！

「しつかりして。早く逃げよう」

痛む足を引き摺りながらイリージャを抱える。もう意識もない。

「おのれえい！イシユヴァールのクソガキが！」

怒り狂って我を忘れてる。正直助かった。いま錬金術がきたらひ

とたまりもない。

が。

錬金術師の声を聞きつけたのか。

アメストリス人の気配が近寄ってくる。

まずい！

早く逃げないと！

まずい！まずい！まずい！

半ばパニックになりながら建物の裏側に転がりこむ。

早く、早く！

こんな時に足を怪我した自分が恨めしい！

イリージャが血を吐いた。

もう、どうしたら…。

あ…ヤバい。

私も血を流しすぎた…。

…。

向こう…から…アメストリス人が…
もう…ダメか。

…。
ごめんね、イリージャ…。…。

…。
…母さん…。

…。
…。

「…丈夫か！」

…う…。

…ま…まぶしい。

「…眼が開いたよ！」

…眼…？

…。

あ…私は…。

…。

…!!!

「イリージャ！」

辺りを見回す。どうやら病院らしい。

「イリージャ！どこ!?」

ベッドから降りようとしたら、

「待って！まだ傷が塞がってないわ」

止められた。

「で、でも」

「一緒にいた子ね？大丈夫、命に別状はないわ」

…無事？

不意に力が抜ける。

私は言葉をかけてくれた女の人を見た。

「…！」

一瞬、血が沸騰する。

その人は。

金色の髪に青色の瞳。

…アメストリス人だった。

必死にカタナを探す。

ない。ない。

あの時と同じ。あの時と同じだ！

焦る。何か武器は…！

「落ち着いて」

焦って動きまわる手をそつと抑える。

一瞬ビクツとしたけど。

…なぜだろう。不思議と落ち着く…。

そのまま私は横にされた。

「あなたが…ロックベル先生」

私も話には聞いていた。

自分たちの命を省みず必死にイシユヴァール人を助けているアメストリス人の医者夫婦がいる、と。

…まさか私が命を助けられるなんて。

そう。あの時路地裏に現れたアメストリス人はロックベル先生だったのだ。

そしてアメストリス軍に見つからないように病院まで運んでくれたらしい。

「…なぜ私を助けたの」

ロックベル先生は笑って答えた。

「患者にアメストリス人もイシユヴァール人もないわ。怪我をしている人達がいたら助ける。それが医者の仕事よ」

「…私は…アメストリス人を…何人も…」

軽く首を振るロックベル先生。

「…それは私達アメストリス人も同じ」

さてと、と呟いて立ち上がる。

「とりあえず養生しなさい。まずは怪我を治すことよ」

私の怪我は切り傷で大したことはないみたい。
まだ無理をすると傷口が開くから、と安静にするよう言われた。
けどイリージャが気になる。

「…いたた」

私は近くにあつた棒を杖代わりにして歩いた。
イリージャは重傷者が集められた一廓にいた。
腹を貫通していたものの、幸い臓器や重要な血管には損傷はなかつたらしい。

今は静かに寝息をたてているイリージャのとなりに座つた。

「…無茶するんじゃないわよ」

そつと呟く。

でも、あの時イリージャが助けてくれなかつたら…。

面と向かつて誉めると調子に乗るから。

(ありがと)

眠つてるイリージャの唇にそつと唇を重ねる。

そのまま立ち上がつて私は歩き始めた。

しばらく歩いた時。

「…なんでアメストリス人がここにいるんだい」

後ろから声をかけられた。

…この声は。

「…おばさん」

そう。サンドウォールから脱出した時に匿つてくれたおばさんだ。
グンジャ陥落のときに行方不明になっていた。

「…スーちゃんかい」

酷い。

おばさんは右目を切り裂かれていた。

「無事だったんだね」

「…おばさん…」

不意に涙が浮かぶ。正直諦めていたのだ。

「話は聞いているよ。あれからずっと戦つてくれていたんだつてね」

何か答えようとしたけど。

(患者にアメストリス人もイシユヴァール人もないわ。怪我をしている人達がいたら助ける。それが医者の仕事よ)

ロックベル先生の言葉が過る。

「…私は…ただ…」

血に飢えてアメストリス人を殺していただけ。

何も…できなかった。

ただ…諦めて…憂さ晴らしをしていただけ。

何も言えずに俯く私。

そんな私に。

「ありがとね、スーちゃん」

優しい言葉がかけられる。

「スーちゃんが敵を引き付けてくれたから私は無事に逃げ出せたんだ」

すると、近くの老人が。

「儂もだ。おかげで孫共々生き長らえたよ」

他のベッドからも。

「俺もだ」

「ありがとな」

「助かったよ」

……………。

……………。

片腕を失った武僧が近づいてきて。

「感謝する」

頭を下げた。

「赤い眼の同胞よ」

……………。

私は。

耐えきれずに。

…嗚咽した。

良かった。

私の居場所はあった。
私のしてきたことは。
：無駄じゃなかったんだ。

第九話 犠牲の先に

聖地の端にあるカンダ。

戦線はここまで後退していた。

圧倒的な兵力差もある。でも国家錬金術師の存在がやはり大きかった。

難攻不落を誇ったグン ज्याを陥落したのもたった1人の国家錬金術師だった。

：悔しい。悔しいけど。

認めるしかない。イシュヴァールには：勝ち目はない。

けど、認めることで見えてくることもある。

民族殲滅なんて事態は絶対避けなければならない。

ならば、生き延びる。

それを最優先にすべき。1人でも多く脱出させる。

最近の私はそんな事を考えていた。

だけど、同じ事を考えていた人がいた。

いや、私以上に深く考えていた。

：いや、いらっしやった。

大僧正ローグ・ロウ様が奥地から前線へ戻り、皆に告げられた。

自ら出頭することを。

「絶対にいけません！」

「大僧正自ら出頭なさるなど！」

「我ら命など惜しみません！大僧正が行かれるならば我らも玉砕あるのみ！」

当然だけど反対意見が大多数を占めた。

「もはや決めた事。何人の言も容れぬ」

でも大僧正も譲らない。

「我が命をもって最後の犠牲とする」

大僧正の眼力に周りの僧たちも黙りこむ。

「……」

私はその場にはいなかった。隣の部屋で聞いていただけ。

だけどいなくて良かったと思う。

その場にいたら思わず「賛成」と言ってしまうそうだったから。
……………。

私は多分…。

イシユヴアラの加護はうけられない…。

まだ完治してない怪我を看てもらいながらロツクベル先生に相談した。

「私…薄情者だよね」

包帯を巻きながらロツクベル先生が。

「そうね」

と答えた。

…思わず絶句する私。まあ、私から聞いたことだけど…。

「それでいいのよ」

呆けていた私に笑顔を向ける先生。

「他人を助けることは大事な事だし立派な事よ」

ふいに真顔になって。

「だけど自分の命を軽んじるような行為は誉められることじゃない」

強い一言だった。

「結果として…それは自分がした事を他人に強要することになる」

治療が終わって私が帰ろうとした時。

「まずは自分を大事にしてね、スーちゃん」

と声をかけられた。

そういえば私、ロツクベル先生の名前知らなかったわ。

「今さらだけど、先生はなんて名前なの？」

少し笑ってから先生は右手を差し出した。

「サラよ。サラ・ロツクベル」

私も笑って右手を差し出す。

交わされた握手。これがロツクベル先生との最後の交流だった。

数日後。

私はまた前線に出た。

今回の目的は殺し合いではない。

大僧正ローグ・ロウの出頭までの警護。

…妙な気分だ。

私は皆を守りたいと願った。その願いが他の誰かの自己犠牲によつて叶えられようとしてる。

大勢を助けるのに少数を犠牲に…か。

こんな現実が見たくて今まで頑張つてたわけじゃない。

犠牲になる大僧正も悲惨だ。だけどそれを容認しなければならぬ
い周りをもつと悲惨だ。

…イシユヴァアは私達にどれだけの試練を課すのだろうか。
止まらない。

アメストリス人も、イシユヴァール人も。

若い兵士を斬り倒しながら周りを伺う。

大僧正が名乗り出る隙をつくることができない！

これじゃいつもと変わらない。ただ憎しみをぶつけあつて殺し合
うだけ。

でも止まれない。死ぬわけにはいかないから。

死にたくなければ殺すしかない。

…アメストリス人を斬りながら。

私は泣いていた。

「…衛生兵！はやく来てくれ！」

私に斬られた兵士を抱き上げながら叫ぶアメストリス人がいた。
端正な顔立ちに細いメガネ。人を殺すようには見えない外見だ。

そのアメストリス人が私に気付いた。

「…お前は！」

メガネの奥に明らかな殺意がうかんでいる。

「…はあ！」

私に向けられた銃をカタナで叩き落とす。

そして背中に手を伸ばしたアメストリス人の喉にカタナを突きつ
ける。

「…背中 of 隠し武器を捨てて」

悔しげに私を睨んだあと、ナイフを投げ捨てた。

観念したように腰を落とすと。

「…殺せ」

と呟いた。

少し前の私なら嬉々としてカタナを首に叩きこんだと思う。けれど、手が止まる。

「…すまん、グレイシア」

そんな呟きが聞こえたから。

「…それ、誰」

私は思わず聞いてしまった。

「…お前には関係ないだろう。殺れ」

素っ気ない返答。

「…誰」

けど聞いてしまう。

「…知ってどうなるんだよ!」

怒りを私にぶつける。

「…誰…なのよ…」

私に睨み付け。

そして戸惑い。

困惑するアメストリス人。

「…何だよ…何で…お前が泣いてるんだよ…」

「わかんないわよ…わかんないわよ…」

ああ、ダメ。涙が止まんない。

「いつまで…殺せばいいのよ…」

私はもう立っていられなかった。

しばらく嗚咽してたらしい。

「…落ち着いたか」

アメストリス人が話しかけてきた。

私にハンカチを投げた。

「…グレイシアは俺の女だ」

「…そう」

涙を拭ってから私は立ち上がった。

「…あなた、生き延びたいよね」

「当たり前だ」

「…もう殺したくない？」

ふう、と息を吐く。

「…出来れば、な」

私は意を決した。この人に賭けてみよう。

「なら協力して」

あのアメストリス人が何かしら働きかけてくれたらしい。

一時的に戦闘が停止した。

その隙に白旗を掲げた大僧正が歩を進める。

遠目にだけどあのアメストリス人が大僧正と会話しているのが解る。

…どうやら、成功したみたいだった。

あの時。

私の提案を受け入れてくれたアメストリス人との会話を思い出していた。

「これで戦いが終われば…」

「私もそれを願う」

「…お前さん、何て名前だ？」

「スーよ。あなたは？」

「…ヒューズ。マース・ヒューズだ」

「…グレイシアさんよろしくね」

「…お前さんも…生きろよ」

第十話 壊れる心

希望だった大僧正が処刑された。

しかし殲滅戦は止まらない。

結局、私達の僅かな希望は裏切りによってあっさり潰えた。

大僧正が亡くなった、という知らせは僅かに生き残ったイシュヴァラの武僧を逆上させた。

ただでさえ不利な状況は武僧の暴走の多発によってさらに悪化し。ついにカンダも陥落寸前まで追い詰められた。

怒りと絶望に振り回されながらも私は躍起になって戦っていた。

カンダにはロックベル先生の病院がある。怪我人が沢山收容されている。

私は怪我人が逃げるまでの囿として戦っているのだ。

いまカンダで戦っているのは十数名の武僧と数百人の一般人。

アメストリス人との兵力差も武力差も圧倒的。本当に玉碎覚悟だ。

正直私も今日は生き残れない、と覚悟していた。

また1人、私に斬り倒されるアメストリス人。

「どうしたの！私を倒せるアメストリス人はいないの!？」

私は敵を挑発しながら歩を進める。

近くの建物から銃声。けど私は気配でとつくに敵の存在に気づいてる。

頭を少し下げて銃弾を避ける。

と同時に建物の窓に足をかけて跳躍。弾を避けられて驚愕してる狙撃兵を両断した。

「アメストリス人の男は腰抜けしかいないのね!」

また通りに降りてさらに挑発。

すると若いアメストリス人が怒りの表情を見せていた。

「イシュヴァール人の小娘が何を偉そ」

問答無用でぶったぎる。

「…あの世で同胞に詫びなさい」

気が付いたら私の周りには誰もいなくなっていた。

「…イーさん！カイさん！」

私と一緒に戦っていた人達もいない。

…また私だけか。

「…腰抜けアメストリス人！もう終わり!？」

とにかく敵を引き付けなければ。

私はまた罵声をあげながら歩き始めた。

夕刻。

私の歩いた後には多数のアメストリス人が倒れていた。

何か最近私の顔を見て逃げ出す奴がいる。

…まあ戦わずにすめばそれもいいか。

イリージャやおばさん達は脱出できたかな…と考えていると。

「ここにいたか、黒目のイシュヴァール人」

私に殺気を含んだ言葉が飛んできた。

「…何？」

「随分と…活躍のようだな。だがここまでだ」

なんか自信たつぷりの奴だ。手に何か変な模様を…。

…錬金術師！

「この国家錬金術師のアタ」

私は皆を言わず斬りかかる！

「つーぐぎやあああ！」

私は男の右手を斬り落とした。

私も伊達に今日まで錬金術師と戦ってきたわけじゃない。

錬金術が何か模様のようなモノから発動するのはわかってる。

だったらまずはそれを叩く！

「こ、小娘があ！」

血の気が失せた顔を私に向ける。

けど、その時には私の刃は男の肩口にあつた。

「イシュヴァアラを冒瀆する錬金術。それを使う錬金術師」

カタナに力を込める。

「お前達は闇より深い場所に墮ちろ！」

鮮血が大地を濡らした。

虫の息だった国家錬金術師にカタナを突き立てる。

それを見ていたアメリトリス人の兵士は一気に戦意を無くす。やがて1人2人と逃げ始めた。やがて我先にと走り始めた。

「……これでいいか」

私も一旦引き上げることにした。

「……なんか背後で「化け物だ」とか「女じゃねえ」とか聞こえたけど。……それでもいいか。」

私は無人と化した病院に顔を出した。

皆逃げれたか、それが気になってたんだ。

中は人の気配はない。怪我人は無事に逃げ出せたようだ。

「……よかった」

安心した。

私も皆の後を追おう。そう決めたとき。

倒れているアメリトリス人が視界に入った。

「……………」

それは……男女だった。

そして、女の人には見覚えがあった。

「……ロックベル……先生……？」

私は近寄って確認してみた。

それは、間違いなくロックベル先生だった。

「そんな……そんなことって……」

虚ろに開いた青い瞳がすでに絶命してることを物語っていた。

「……ロックベル先生……」

不意にロックベル先生の笑顔が過る。

『サラ。サラ・ロックベルよ』

あの時の会話と。握手の感触が。

……私の心を砕いた。

「……………うわあああああー！」

私は初めて。

アメリトリス人の為に泣いた。

走った。

とにかく走った。

涙を流しながらカタナを振り上げる。

私はもう、どうでもよくなった。

何も考えず。

アメストリス軍の陣地に突っ込んだ。

突然現れた私を見てアメストリス人は呆然としていた。

そんなの関係なく、私はただの「殺戮」をはじめた。

私の全身を血が染める。

「誰だ！」

叫びながら斬る。

「誰だ！ ロックベル先生を殺したのは誰だ！」

誰彼構わず斬る。

「誰なのよ！ 出てきなさいよ！」

泣きながら斬る。

：アメストリス軍の兵士の食堂は大混乱に陥った。

何人斬っただろう。

肩で息をしながら私は立っている。

私は銃を構えた兵士に周りを囲まれていた。

「出てきなさいよ！ 殺してやる！」

まだ興奮が抜けない私は叫ぶ。

そこに見覚えのあるアメストリス人が来た。

「おい！ お前どういうつもりだ！」

あの眼鏡：確か。

「：マース・ヒューズ」

あの時、私の提案を受け入れてくれたアメストリス人。

「お前、もう殺したくないってのは嘘っぱちか！」

その言葉と共に大僧正の顔が浮かんだ。

「うるさい！ お前が言うな！ 大僧正を殺したお前らアメストリス人が言うな！」

私は泣き叫ぶ。ほとんど絶叫だった。

マース・ヒューズは少し苦い表情を浮かべる。でもすぐに怒りに

とって代わった。

「ならお前は何をした!!俺の部下を斬り殺したのは誰だ!」

「うるさい!うるさい!うるさあい!」

私は正常とは言えなかったと思う。

…多分、壊れてた。

「ロックベル先生を殺したのは誰だ!」

また叫ぶ。

「…ロックベル?」

マース・ヒューズが怪訝な顔をする。

「もう面倒くさい!みんな殺してやる!」

カタナを握り直し、殺意を纏い。

マース・ヒューズに斬りかかる。

「…もう死んでいましたよ」

その言葉が私の耳に届く。

「私の部隊がたどり着いた時には…もう亡くなられていましたよ」

その言葉を発した人間。

長い黒髪を後ろでまとめた冷たい目をした男が私を見ていた。

第十一話 循環

「…あんた誰よ」

冷たい目をした男はふつと笑みを浮かべた。

「ああ、すいません。先に名乗るべきでしたね」
変な感じ。笑みさえ冷たく見える…。

「ゾルフ・J・キンブリーです」

「…国家錬金術師？」

「ええ。あなた方を殲滅するために派遣された国家錬金術師です」
そしてキンブリーとか名乗った男は。

「…本当にイシユヴァール人は面白い」

赤い光を発生させ。

「あなたのような傑作を生み出すのだから」

私の周りを吹っ飛ばした。

「…がは！」

どれくらい吹き飛んだのか。

私はアメストリス軍陣地の端まで飛ばされた。

…殺気に気付いて避けてもこれなの!?

「…いたた」

かすり傷ですんだのは本当にラッキーだった。

「…私、何をしてんだろ…」

皮肉なものだ。キンブリーとかいう国家錬金術師のおかげで正気を取り戻すなんて。

「…脱出しよう」

とりあえずここにいるのは得策じゃない。

近くに落ちていたカタナを拾って駆け出した。

警報が盛んに鳴り響く。

私が入った兵士の食堂から激しい炎が吹き上がっていた。

…よく考えたらキンブリーっていう奴。味方も吹き飛ばしてな
かったか？

「いたぞー！」

サーチライトが私を照らす。

ヤバイ！私は闇に飛び込んだ。

私を探索する兵士も増える一方。

…どうしよう。

今更ながら自分のしでかした事を悔やむ。

「…ロックベル先生…」

初めて尊敬しえたアメリリス人。

…先生。私、絶対生きるからね。

生きて生きて生き抜いて。

先生殺した奴私が斬り裂いてやる！

「北側を探せーあつちはまだ手薄だ！」

私の近くで聞き覚えのある声。

兵士の気配が遠のく。そして。

「…よお」

私が隠れていた物陰をマース・ヒューズが覗きこんでいた。

「…なんのつもりよ」

私に肩を貸すマース・ヒューズに聞いた。

「…お前には命の借りがあったからな」

少し笑って。少し陰らせ。

「それと…ローグ・ロウの件は…すまなかった」

私の顔を真っ直ぐ見つめた。

妙なものだ。本当は敵の裏切りに怒りをあらわにすべきなのに。

何故か怒りが沸いてこない。

…ロックベル先生のせいだからね。

「…気にしないで。どうせあなたより上の人間の判断でしょう」

「…ああ」

「…誰？」

目を細めるマース・ヒューズ。

「誤解してもらっちゃ困る。俺はお前とはまだ敵同士だ。何でも馴れ合えると思うなよ」

「…けっこう辛辣ね」

「俺の仲間を殺したことはないに代わりない」
ちくりと心に刺さる。

「…ごめんなさい。私もどうかしてた」
チラツと私を睨んで、また視線をはずす。

…この会話はこれで打ち止めとなった。

「…この倉庫の先に川がある。そこからなら逃げられるだろ」
奥を指差しながら私を誘導する。

「見回りがくるぞ。早くしろヒューズ」

もう1人誰かいる。あれは…？

「ロイ、時間を稼げ」

ロイ？

「気にするな。早く行け」

私の背中を押して手を振る。

「…この恩、必ず」

私は全てを言えないまま、闇に紛れた。
痛む身体に鞭打って走る。

マース・ヒューズの言うとおりに、先には川があった。

迷う暇はない。

一気に身体を空中に投げ出す。

冷たい水に全身を濡らしながら必死に泳ぐ。

こうして私はアメストリス軍の追撃を振り切った。

私は運良くイシユヴァール人の家族に助けられ。

体力と気力を回復させて。

また、戦場へ向かう。

「お姉ちゃん、行っちゃうの？」

この数日間につきかり仲良くなった女の子に泣かれる。

「ごめんね。また…戦うわ」

「私たちと来なさいよ」

「そうだよ。俺たちはお前さんのおかげで脱出できたんだ。恩返しを
させてくれ」

口々に私に逃げることをすすめてくれる。

…やば。泣きそう。

「ありがとう。けど…まだ生き残りはいるはずだから」
後ろ髪を引かれながらも私は歩き出した。

「気を付けてね。赤い眼の同胞よ」

気配で女の子の手を振ってくれてるのがわかった。

けど振り返らない。

…戦えなくなりそうだったから。

不思議なものだ。

私が命を助けた人達。その人達によって私も助けられている。

いつだったろうか。

シンのフー爺様が練丹術について語ってくれたことがあった。

「この世の全てのものが循環している。空も大地も海も…そして人間も。全が一、一が全。」

それが練丹術の基本なんじゃそうじゃよ」

…今、その言葉の意味がわかった気がする。

戦場に近づきながら、最近知り合ったアメストリス人のことを考える。

アメストリス人でありながらも最後までイシユヴァール人を助け続けたロツクベル先生。

私に命の恩があるから、と自らの危険を省みずに私を逃がしてくれたマース・ヒューズ。それに協力してくれたロイとかいうアメストリス人。

…全てのアメストリス人が悪いわけじゃない。

中には信用するに足る人達もいる。

…だったら。解り合えないのだろうか。

そんな理想が頭を埋め尽くす。

その時。

足元にあった小石に足を取られる。

少しよろめいて頭が傾く。

元々頭があつた空間を一発の弾丸が通り過ぎた。

第十二話 黒い瞳対鷹の眼

Fugitive side

空気を裂く音に反応して物陰に隠れる。

「嘘でしょ…?」

私が最大限気配を感じとれる場には何も感じなかった。

どれだけ遠い距離から狙撃してるの!?

少し辺りを見回す：危ない!

少し頭を出しただけで撃ってくる。反応といい正確性といい…恐ろしい。

「ていうか私圧倒的に不利じゃない」

狙われている以上この場所から移動できない。つまり間合いを詰めるなんて夢のまた夢というわけ。

…どうしよう。

とりあえず思いつく手は…夜まで待つ。それしかない。

いまは昼頃だから…長い1日になるわ…。

Sniper side

一発目。

はずれた。

運の良い子ね…。

二発目。

少し頭を出した瞬間を狙う。

…避けられた。

恐ろしく勘のいい子。

…時間がかかりそう。

Fugitive side

正午。

暑い。

じつとしてるしかないうえに日陰もなし。

最悪。

…あれからかなり時間たったけど。もういないかな。

近くにあった木切れを放り投げてみたら。
見事に粉碎。

「なんて根気があるやつなの」
内心呆れつつも認めざるを得ない。相手は一流の狙撃手だ。

「…」
弾を使わせて弾切れを狙うのもありか。

よし！

先ほどの要領で石やら木切れやら構わず投げまくる。
しかし。

一発も撃たない。

「…なんて奴」

あのタイミングで飛んでくる物を見分けている…ということになる。

ということは。間違いない。

「…鷹の眼が相手か」

噂で聞いている。アメストリス軍には鷹の眼と呼ばれる凄腕のスパイパーがいる、と。

ならば油断はできない。

夜になるまでの根比べね。

さすがに鷹の眼でも夜は狙撃できないでしょ。

S n i p e r s i d e

しばらくの小康状態。

ふいに何か飛び出す。反射的に撃ち抜く。

三発目。

木切れか。

それからフェイントが続く。もう同じ手は食わない。
……………。

手強いわ。

ここからでは無理ね。

F u g i t i v e s i d e

それから小一時間。

小康状態になつてはいたけど、油断はできない。
とりあえず辺りの気配を探っていた。

動く者はいない。

額から流れた汗を拭う。

その時。

左側から視線を感じた私は壁の反対側へ跳んだ。

私のいた場所に着弾音。

あいつ…いつの間に私の左側に!!

続く着弾音。ヤバい!

必死に走り抜けて崩れかけの家屋に逃げこむ。

当然入り口は狙われている。私は弾を避けるように回り込んだ。

「痛っ!」

脇腹をかすった。

とりあえず奥に逃げ込んで周りを伺う。

…誰もいない。

安全を確認してから傷を確認した。

良かった。皮一枚ですんだ。

とりあえず止血だけする。

「…さて」

今の状況を整理する。

四方は壁がある。窓や入り口にさえ気を付ければある程度は自由
がきく。

しかし、周りが見えないというデメリットもある。

鷹の眼はいまのままでは私を撃てないとわかっているはず。

ならば。

アメストリス軍を動かして私を追い出す。それが一番可能性があ
る。

多分、無線か何かで味方呼び寄せられるだろう。

私にとっては最悪のシナリオだ。

でも。

チャンスでもある。

Sniper side

気付かれないように移動し照準を合わせる。

捉えた！

四発目。

…嘘でしょう…。

しかしチャンスは続く。

五発目。

駄目。

六発目。

これはダメー。

七発目。

必殺のはず。

…手応えはあった。でもかすった程度。

家屋に逃げ込まれた。

汗が伝う。

…あれを避けられるなんて。

こうなつては手出しができない。夜になる前に仕留めなくては。

…仕方ない。

無線を取り出してスイッチをいれた。

Fugitive side

そして夕方。

案の定、数人のアメリストリス人が近寄ってきた。

アメリストリス人が近寄ってくる角度からいま鷹の眼がいるであろ

う方角を予想する。

アメリストリス人が入り口付近にきた。

いまだ！

入ってくるより先にアメリストリス人を突き殺す。

そして鷹の眼がいる方角に死体を向ける！

着弾！

やった！これで鷹の眼がいる場所を特定できた。北の見張り塔！

Sniper side

仲間が倒れるのが見えた。

出てくるタイミングを予測。

八発目。

仲間を盾にして防ぐ。最悪な手を…！

しまった。位置を悟られた。

Fugitive side

素早く2人目を斬り殺す。

そして3人目の首筋にカタナを当てて鷹の眼を睨んだ。

…やっぱり。撃つてこない。

汚いやり方だけど…人質が一番効果的だわ。

そのままジリジリと家屋から離れていく。

Sniper side

人質をとられた。

私が狙撃できないように仲間の陰に隠れながら移動している。

…くう…不味い…。

Fugitive side

その時、人質のアメストリス人が喚きだした。

「イシュヴァール人の娘か、貴様」

無視。

「最近黒と赤の眼をもった小娘が暴れまわっているらしいが…」

無視。

「貴様にどれだけの仲間を殺されたか…」

…無視。

「イシュヴァール人など殲滅されて当たり前だ！滅びろ！」

少しカタナを動かす。

「ぎゃあああ！」

耳を片方削ぎ落としてやった。

「黙れ、屑が」

私が呟いたと同時に一発地面に着弾したのはたぶん警告だろう。

でも私は無視してこの場所から離れた。

Sniper side

仲間の耳が削ぎ落とされる。

カツとなり思わず引き鉄をひく。

九発目。

当然はずれる。

：威嚇にもならない。

F u g i t i v e s i d e

辺りから光が消える。

すっかり夜だ。

もう狙撃もできないだろう。

私は人質のアメストリス人を峰打ちで昏倒させて放り出す。

長い1日だった。

私はアメストリス人から奪い取った食料や弾を背負って戦場へ向かった。

S n i p e r s i d e

：銃をおろす。

周りはまだ暗い。月明かりもない新月ではなす術もない。

「…なんて奴なの」

生きているかはわからないけど仲間を助けないと。

荷物を背負い、塔から離れた。

第十三話 未来へ

私が馬鹿をしていた間に戦況は最終段階に進んでいた。聖地の9割はアメストリスに土足で踏みにじられ。あと残っているのはダリハのごく一部のみだった。夜になってからイシュヴァールの生き残りとは合流した。

「嘘…でしょ」

合流してみても驚いた。

生き残りの約7割が女性や子供…非戦闘員なのだ。

「どうして…？」

「アメストリス軍の奴ら、ホントに見境無しなんだよ」

数人しかいない武僧が吐き捨てるように話した。

「子供だろうがイシュヴァール人とわかれば容赦無くズドン…飼われていた犬まで殺してたなんて話もあるくらいだ」

子供を抱えた女性が涙声で。

「あちこち囲まれて…逃げることもできないのよ」

辺りから啜り泣く声が聞こえる。

こんなに暗い…深い夜は初めてだった。

結局、残された手段は2つ。

逃げるか、死ぬか。

1人でも多く逃げられることに望みをかけての一斉退却。

あるいは全員玉砕覚悟で敵に突っ込みイシュヴァールの意地をみせる。

…なんなのよ、これ。

私、こんな未来を願って戦ってきたわけじゃない…！

「スーちゃん」

ふいに声をかけられて頭を上げる。

そこには片目に包帯を巻いたおばさんがいた。

「…おばさん…」

「私も逃げ遅れてね…」

「…イリージャは？」

「一緒だよ。いまは寝てる」

…安心していいのかよくわからない。

脱出してほしかった。

…。

…脱出…か。

「おばさん、お願いがあるんだけど」

「…なんだい」

おばさんは宿屋を経営する傍らであの地域の纏め役をしていたはず。

「密入国に詳しい人を紹介してほしいの」

いまダリハにいるイシュヴァールの生き残りを束ねているのは最年長の武僧だった。

私がロックベル先生の病院で出会った片腕の武僧だ。

その武僧に頼みこんで会議を開いてもらった。

時間は深夜になっていた。

「撤退…か」

私はいま自分が考えていたことをぶちまけた。

「それじゃあ聞くが…どこに撤退する？」

当然、返ってくる疑問。

…大体、逃げられるのであれば皆とつくに逃げてるだろう。

私は一度大きく息を吸い、答えた。

「…包囲が手薄な砂漠に」

一気に静まりかえった。

…というか呆気にとられてる。

…普通砂漠に逃げるといふことは。

「死ぬ気か！」

…そうなるわね。普通なら。

「なぜそう主張する？」

片腕の武僧が私に聞いてきた。

「答えは簡単。これしか生き延びる手はないから」
若い兵士が怒号をあげた。

「ふざけるな！全員揃って砂漠で死ねっていいのか！」

その一声に呼応して意見があがる。

「何の準備も無しに砂漠を越えられるか！」

「怪我人もいるんだぞ！」

そして極論へと傾く。

「ならば！我らイシユヴァール人の誇りを胸に！」

片手に手投げ弾を掲げて。

「一齐に自決してイシユヴァアの元へ！」

集団自決を主張しはじめる。

「ちよつと待って！私の話を最後まで聞いてよ！」

私の必死の大声。

ようやく紛糾しかけた会議は沈静化する。

乱れた息を整えると私は話し始めた。

「何の策も無いわけじゃないの。最近までの唯一の脱出路だった東の山脈も街道を抑えられた以上もう使えない。アエルゴも亡命を受け入れない。だったら砂漠以外ないじゃない」

「だから！砂漠行つてどうするんだよ！」

「クセルクセス遺跡に行くの」

片腕の武僧が立ち上がる。

「…シンか」

私は頷いた。

「私の父は皆知つてのとおり行商でシンとの繋がりがあがる。さらに私の血筋は昔から剣術の修行の為にシンに留学する者が多かった。私もシンにはかなりの伝がある」

あんなに紛糾していた会議はまるで静かになった。

「さつきおばさ…いえシャン様の紹介でハンというシン人に会ってき
たわ」

「ハンて…確か密入」

「いまはそういうことはいわないで。とにかく、そのハンという人が全面的に協力してくれる。クセルクセスまで必要なものは用意してくれるって」

「…どうやって協力をとりつけたのだ？」

「…私の父が遺した物で支払いました」

父さんが持っていた権益はかなりのものだ。その繊細を記した書物を渡した。

「本当に大丈夫か!？」

「裏切られるかもしれないぞ」

私はカタナの刃を握った。

「シンの人は一度交わした盟約は絶対に破りません！」

血が流れ出る手を皆に示した。

「だから私は盟約を信じます！」

絶対の宣誓を示す。

「半分しか混じってないかもしれない…それでも」

「このイシュヴァールの血をかけて」

静かになった会議は片腕の武僧によって締められた。

「赤い目の同胞により道は示された。ならば我らは戦うのみ」

私の案は。

「我らの子らを未来へと導くために」

可決された。

第十四話 生死の涯て 前

日が昇り始めた頃。

私達は作戦を開始するため移動した。

…これが後に言うところのダリハ攻防戦。

イシュヴァール殲滅戦の最後の戦いだ。

ダリハに残されたイシュヴァール人は全部で1215名。

そのうち主力となる武僧が12名。

一般人の志願兵が286名。

あとは非戦闘員。女性や子供がほとんど。

今回の作戦はどれだけの非戦闘員を逃がせるか、だ。

つまり、戦闘員は全員生き残ることを想定してないのだ。

私も…生き残るつもりはなかった。

私はおばさんやイリージャには何も言わずに部隊に加わった。

当然武僧からは反対もされたけど…。

いまさら命を惜しむつもりもなかった。

主力である武僧の部隊といる私は意外な人物と再会した。

「生きていたんだな」

「…おっさん」

そう、あの嫌味なおっさん武僧だ。

「なんでここにいる」

「関係ないでしょ」

駄目だ。やっぱり相性最悪。

「死ぬ気か？」

「あんたも？」

…。

「…世も末だな」

軽くため息をはいた。

「…末なんてレベルじゃないわ」

「そうだな。女が戦場に出るなんて…末なんてレベルじゃない」

「またその話!？」

また深いため息。

「あのな。誰だつて目の前で女が殺されるとこんなか見たくないんだよ」

…結局。

私は何も言い返せなかった。

9時くらいの日の高さになった。

作戦開始の合図がされた。

作戦内容はこうだ。武僧と私を含む少数精鋭の隊がアメリリス陣営でゲリラ戦を展開して混乱をさそう。

残りの部隊が砂漠に近い防衛線に攻撃。

そして手薄な砂漠方面へ非戦闘員が一気に脱出を図る…という感じ。

一体何人生き残れるだろう。でも、やるしかない。

私はアメリリス軍へ乗り込んだ。

強大なアメリリス軍と対等に戦える数少ない精鋭は必死に戦った。

もう弾もない。手投げ弾も尽きた。武器なんていっても先の折れた剣や刃の欠けたナイフばかり。

それでも私達はアメリリス軍にそれなりの混乱を起こした。

アメリリス人をまた1人斬り捨てた。

間髪入れず銃剣で突撃してくる兵士の喉を掻っ斬る。

私はいま返り血でひどい状態だった。

敵の何割かは私を見ただけで逃げていく。今はありがたいけど…何か複雑。

敵もかなり倒したけど、こちらも半数くらいの被害が出ている。

周りの味方と頷きあってから、一度戦線を離脱した。

とりあえず私が斥候として砂漠方面を探つてくることになった。

…まともに動けるのが私くらいだったのだ。

まず私は砂漠近くで戦っている部隊を見に行った。

辺りを探りながら民家の屋根の間を飛び越える。

敵に見つかることもなくたどり着き。

「……!!」

「あまりの惨状に言葉を失った。

全滅なんて生易しいものじゃない。

生き残りなんて皆無だった。

まさに、殲滅。

「そんな……」

「それでは非戦闘員も……」

「……」

私は必死に駆け出した。

妙な風景。

そんな気分だ。

先程は凄まじい状態だったのに。

こちらは真逆だった。

何人が倒れているイシュヴァール人はいる。だけど圧倒的にアメ

ストリス人の方が倒れていた。

「……?」

地面に降り立ってみる。

すると幾つもの爆破の跡が確認できた。しかも巧妙に偽装してある。私じやなきやわからなかったかもしれない。

そう、これはシンの戦法だ。

「フー爺様……ランファン……」

私は泣かずにはいられなかった。

ハンさんはここまで盟約を守ってくれたのだ。

シンの情の深さに感謝した。

フー爺様達が味方してくれた……けど、あてにはできない。

そう、盟約は盟約。

盟約以上のことは期待してはいけないのだ。

しかし。

前線に戻った私は精鋭部隊が潜んでいた建物が燃え上がっているのを見た。

……見つけたんだ!

何も考えずに飛び出そうとする私。

が、腕を掴まれて止められる。

そこには仲間の武僧たち。

…え？

思わず怪訝な顔をした私の背後で。

燃え上がっていた建物が吹き飛ぶ。周りにいたアメストリス軍も巻き込んで。

そう、罨だったのだ。

でも。

「嘘。火薬なんてほとんど残ってなかったのに…」

武僧のおっさんがニヤリとして指差す。

その先には黒い影が2つ。

妙な仮面を被っている。

「あ…い」

1人は仮面をとって笑い返した。フー爺様！

もう1人は…何もしない。ランファンね！

私は必死に手を振る。

フー爺様は私に頷いてから。

ランファンは控えめに手を振り返してから。

消えた。

(ありがとう、本当に…！皆をお願いします…)

私は心で叫び続けた。

第十五話 生死の涯て 後

フー爺様達のおかげでほとんどの非戦闘員は脱出できた。あとは無事に砂漠を越えてくれれば…。

あとダリハに残っているイシユヴァール人は数十名。

武僧が3人。志願兵が9人。後から合流したり逃げ遅れたりした一般人が16人。たぶん、他にもいる…と思う。

そして…私。

生き残るため。未来を掴むため。

必死で戦っていた。

「最後の囀作戦を行う」

片腕の武僧が語り始めた。

「我らの戦力ではもはや全滅は必至。ならば、何の関係も無い一般人を逃がすことを最後の目標にしたい」

俯く武僧達。それってつまり…。

「命を捨てても構わない、という者だけでいい。この先のダリハの会議所で敵をひきつけてほしい」

片腕の武僧は続けた。

「あとの者は一般人を警護しつつダリハからの脱出を。ただ、これも望みは薄い」

そして皆を見回し。

「囀を引き受けてくれる者は前へ出てくれ」

そう言つて片腕の武僧が一番に名乗りをあげた。

結局。

前にでたのは4名。

片腕の武僧。

あのおっさん。

若い志願兵。

そして…私。

「娘よ、お前は…」

片腕の武僧が何か言おうとしたのを遮る。

「もう男も女もないわよ。赤い眼の同胞。それだけでしょ」
「…仕方ないだろ」

おっさんは諦めたように呟く。

「…そちらの若い方も…」

「もう家族は死んだ。思い残すことは無い」

片腕の武僧は深いため息をはいて。

「…仕方ない」

諦めた。

時間がない。

決まったことはすぐ実行された。

「イシュヴァアラの御加護を」

お互いに言葉を交わして別れた。

生き残れる可能性はほとんど無い。

でも僅かでも可能性があるなら私は戦う。

『自分を大事にね』

一瞬ロツクベル先生の言葉が過る。

…。

…先生、ごめんなさい。

約束…守れない…。

目立つようにわざと敵の面前を駆ける。

注目を集めつつ後退。

とにかく逃げている人達から引き離す。

そして数人のアメストリス人を斬り倒し。

怪我をした志願兵を担ぎながら。

私達は会議所へ立て籠った。

もう、袋の鼠。

本当に、逃げ場は無い。

数分もしないうちに会議所は包囲された。

「…無事に逃げてくれ」

片腕の武僧が祈っていた。

他は言葉も無い。

食糧、弾薬、薬。全て尽きた。

残った武器はおっさんのナイフと私のカタナだけ。

…本当に。

これで終わりだ。

「…もうちよつとアメストリス人を道連れにしてやりたかったな」

おっさんが呟く。

「リイア。ライ。俺ももうすぐ逝くからな」

怪我をして横になっている志願兵が涙を流す。

とりあえず私は。

(どうやって死のうか)

なんて考えていた。

その時。

《立て籠っているイシユヴァール人に告ぐ》

外から声がした。

《完全に包囲下にある。降伏したまえ》

降伏？

《危害は加えない》

…何をいまさら。

さんざん同胞をなぶり殺しておいて…!

《出てきたまえ》

当然、私達は動かない。いまさら降伏するつもりもない。

「誰がアメ野郎の言うことなんか信用するか!」

おっさんが叫び返した。

しばらく沈黙が続く。

《ならば攻撃する。いいな》

再び響く声。

私達はもう反応しなかった。

そして、5分後。

敵の一斉射撃が開始された。

会議所の壁は簡単に穴だらけになり。

弾が室内を飛び回る。

弾はイシユヴァール人の身体を容赦無く貫いた。

それでも一斉射撃は止まない。

銃声が途切れた。

なぜだろう。

私は…生きてる。

一瞬意識が途切れたように思えた。目の前が真っ暗になったからだ。

でもそれは違ってた。

真っ暗になったのは。

私の上におっさんが覆い被さっていたから、だった。

「…がはっ！」

おっさんが血を吐き出す。

「な、何をしてんのよ！」

おっさんは私を見て。

「だから…言ったら。女が死ぬのは見たくねえ」

笑っていた。

「なんで…なんで…」

私は…泣いていた。

「私も死ぬのよ！いまさら何を」

「死んではならん」

倒れていた片腕の武僧が声も絶え絶えに。

「生きよ…」

そう諭す。

「でも…私…」

「俺や…家族の分まで…」

怪我をしていた志願兵まで。

「生きてくれ」

私を生かそうとする。

「なんでよ！なんでよ！最後の最後に…私だけ除け者なの！」

「うるせえよ…」

「お主が死んでは…ロックベル先生に顔向けできぬ…」

「女が死ぬのは…もう嫁さんだけで…勘弁してくれ…」
おっさんはナイフを握って私に近づく。

「これで…お前ともおさらばだな」
ナイフを振り上げ。

「じゃあな」

私の右眼に突き立てた。

《生きているとは思えんが…最後通告だ。降伏しろ》
激痛のなか。

私が聞いたのは。

アメストリス人の最後通告と。

壁が吹き飛ぶ音と。

「さらばだ」

「生きよ」

「…同胞よ」

男たちの、

最後の言葉だった。

第十六話 黒い瞳の同胞

私は死んだのだろうか。

あの時、私達を襲った衝撃は凄まじいものだった。

右眼の痛みすら忘れてしまうほどの。

だけど、私にそれが襲いかかる寸前。

何か、暖かい…とても暖かい何か私を包んだ。

そして私は…。

…。

…。

…。

う…。

ま…眩し…。

なんでこんなに眩しいの…？

私は…死んだんじゃない…。

…。

…！

「…ここは…」

なぜかベッドに寝ているみたいだ。どうやら死んでないみたい…。

…ベッド？

「大丈夫ですか？」

そんな私を看護婦さんらしき人が覗きこんだ。

「せんせーい、ヒューズさん意識回復されました」

私の返事を待たずに看護婦さんらしき人はバタバタと駆けていった。

…ヒューズさん？

もう、わけがわかんない。

しばらくして私の視界に知らない女の人が入ってきた。

綺麗な人…なんとなくロックベル先生がうかんだ。

「大変だったわね。イシユヴァール人に捕まっていたそうね」
？

は？

「な、何言ってるの…」

ほんとに何なの？私が捕まってる？

「私、イシユ」

突然口を塞がれる。

「静かに。あなたは今アメストリス人として病院に収容されてるから」

女の人は私に小声で呟いた。

そして微笑みを浮かべて。

「マース・ヒューズから聞いてない？私がグレイシアです」

それから1週間ほど、何がなんだかわからない状態のまま過ごした。

とりあえずわかったことは。

私は生きていること。

イシユヴァール人だとは思われてないこと。

あの時の衝撃で体のあちこち怪我を負っていること。

そして。

右眼を失ったこと。

ある意味茫然と日々を過ごす私をグレイシアさんは甲斐甲斐しく世話してくれた。

どうやら私はマース・ヒューズの親族みたいなことになっているみたい。

そんな感じでグレイシアさんは接した。

「なぜ私を死なせてくれないの!?!」

自分だけ生きていることに耐えられなくなってるグレイシアさんに詰め寄ったこともあった。

「私だけグレイシアさんは笑って言うだけだった。」

「私はあの人を信じてるだけだから」

しばらくして退院するとグレイシアさんはあちこちを案内してくれた。

それで私がいまいるのはセントラルだとわかった。

イシユヴァールとはまるで違う近代的な街並み。
私が：私達が戦った国の強大さを実感させられた。

グレイシアさんとすっかり打ち解けたころ。

私のところに2人の軍人が訪ねてきた。

1人はマース・ヒューズ。

もう1人は黒髪の男。

そう、国家錬金術師のあの男だ。

「：恩でも売ったつもり？」

マース・ヒューズは肩を竦めた。

黒髪の錬金術師は何も反応なしだ。

「まあ、無事で何よりだ」

マース・ヒューズが笑いかける。ふうん、こういう笑い方できる奴だったんだ。

「で、何の用？私を逮捕しにきたの？」

今度は黒髪の錬金術師が口を開いた。

「君は逮捕される心当たりがあるのかね？」

「：さっさと死刑にでもしてよ」

黒髪の錬金術師が私の言葉を片手で遮った。

「君が言っている黒と赤の眼のイシユヴァール人の少女は死んだ」

…え？

「どういうことよー！」

「君はただ巻き込まれただけの一般人：ということになっている」

マース・ヒューズは眼を閉じて。

「あの時、お前さんを助けたのは俺たちじゃない」

あの時、何が起きたかを話し始めた。

「生きているとは思えんが：最後通告だ。降伏しろ」

ロイの呼び掛けにも答えることはなかった。

(あの嬢ちゃん…)

生きていてほしい：というヒューズの希望も無駄だったようだ。

ロイは右手をあげると、バチンと鳴らした。建物は室内から吹き飛んだ…。

煙が薄まってから廃墟と化した建物内へ遺体の確認のためアメストリス軍は近づいた。

それぞれが瓦礫を退かしなから搜索を続ける。

「おい、いよいよだな」

「あのクソ女の死体と御対面だぜ」

兵士達が笑いながら話していた。実際多くの味方を殺した「赤と黒の眼のイシユヴァール人」は憎しみの対象となっている。

「何か…なあ」

ヒューズが悲しげに話す。

「これが…戦争というものなのだろうな」

ロイはいつもと変わらずに答える。しかし視線を兵士達に向けようとはしなかった。

その時。

背後で瓦礫が崩れた。

振り向くと、イシユヴァール人の武僧が立っていた。

しかし満身創痍で立っているのがやっと、という感じだ。

「よく生きていたものだ…動くな」

ロイが銃を向けた。

「投降しろ。悪いようにはしない」

ヒューズもそれに倣う。

「…頼…む」

武僧は何かを言っている。

それ以上何かをする風でもない。

徐々に距離を詰める。が、動かない。

「女…助け…」

ようやく武僧のか細い声が聞こえる距離になった。

「手をあげろ」

再度忠告するが、やはり変わらなかった。

仕方なく引き金を引こうとすると。

「頼む…助け…」

という声が聞こえた。

「この娘は…アメストリス…人…」

そして多量の血を吐き。

「…黒い…瞳…の…同胞…」

武僧は力尽き倒れた。

お互いに顔を見合わせ、武僧の背後の瓦礫を動かす。

「…！」

そこには片眼を潰された少女がいた。

全身に傷があるものの、息はある。

間違いない、あの少女だ。

「マスタング少佐、何事ですか…！」

マスタングの部下が近寄ってきて少女を見た。

「ア、アメストリス人…ですか？」

ロイとヒューズは再び顔を見合わせる。

兵士の反応を見てピンときたのだ。この部隊はこの少女と交戦したことはない。

ならば顔を知らないはず。

「どうやらイシュヴァール人に捕まっていたらしい。すぐ救護所へ」

「はっ！」

マスタングの部下は勢いよく敬礼すると担架を手配しに走りだした。

とりあえずヒューズは少女を瓦礫の間から引っぱり出す。

すると。

「…!!」

少女を守るかのように、少女の周りに2人のイシュヴァール人の遺体があった。

「この娘を守るために…」

ヒューズはこの時初めて、イシュヴァール人の真価をみた気がした。

「お前さんを生かしたのはイシユヴァール人達の遺志だ」

私は何も言えなかった。

私、生かされたんだ。

「黒い…瞳の…同胞…」

同胞…。

私…私…。

「うう…ううああああああ!!」

何だよ、何で。

私にこんな重いものを背負わせるのよ…。

終章 涯てからの始まり

あの3人がくれた命。

どうしたらいいのかな。

「…おかげで死ねなくなっちゃったじゃない」

雨降りのセントラルを見下ろしながら、1人泣いた。

私はいまグレイシアさんの部屋に居候している。

すぐに出ていくつもりだったけど。

「今はまずい。お前さんの顔覚えてる奴も多いからな」

ヒューズに止められて足踏み中だ。

…お願いだから私の前でイチヤつくのは止めてほしい。

私はいま平和の中にいる。

だけど現実が変わるわけじゃない。

その事実が私の心の重荷になっていた。

結局、イシユヴァールはアメストリス軍によって占領・閉鎖された。

イシユヴァール人の被害者数は不明。少なくとも半数は犠牲に

なった…らしい。私達イシユヴァール人は家族・財産・故郷・存在意

義すらも奪われて散々になった。

他国へ逃れた者、国内でスラムを形成する者…どちらにしても行く

先は悲惨だった。

勝利に沸き返るアメストリス人を見ると正直殺意が芽生える。だ

けど…いまは。

耐えるしかない。

耐えるしか…。

私はアメストリス国内に指名手配されていた。

「いた」…なぜ過去形かというと。

私はダリハ防衛戦で死亡したことになるのだ。

そういう報告書をマスタングが提出したことで私の指名手配は解

除された。

私は戦後軍法会議所に所属することになったヒューズの偽造でグ

レイシアさんの妹として戸籍を手にいれた。

私の意志とは関係なく私が生きるための手筈が整えられていく。

：私はまだ「生きる意味」を見出だせていないのに。

それと、私の右眼は回復しなかった。

あのおっさんに傷つけられた右眼にはしつかりと傷痕が刻まれている。

なぜあんなことをしたのか。理由はあとからわかった。

潰された右眼は赤い色：イシュヴァール人特有の赤眼だった。けどそれが塞がったことで誰も私がイシュヴァール人だと証明できなくなってしまうた。

収容現場で当然私を殺そうとした者もいたらしい。けどヒューズやマスターグはアメストリス人として私に手を出させなかった。

あのおっさんはこの為に苦渋の判断を下したのだ。

私を：生かすために。

それとカタナも失った。

私の収容時のゴタゴタで行方不明になった。

あの混乱のなかで誰かが持ち去ったのだろう。まあ、正直な所どうでもいいけど。

そんな感じでただ時は無意味に過ぎていき。

あつと言う間に半年が過ぎていた。

ヒューズとグレイシアさんが結婚する。

そんな話が持ちあがった時、私は旅立ちを決意した。

いつまでもいて良い場所ではないし。いい加減グレイシアさんの好意に甘えすぎた。

その旨を伝えると、ヒューズには反対されなかった。

グレイシアさんは大反対だったけど…。

「お前さんが決めたことだからな」

ヒューズの説得にグレイシアさんも泣く泣く折れて。

私がセントラルを去る日は6月1日と決まった。

5月の半ば、セントラルへ出張で来ていたマスターグに呼び出された。

「ここから去るそうだな」

「…ええ」

とりあえず返事はする。

…本音を言えば、私、この人苦手。

「まあヒューズの新婚生活を邪魔する野暮を働かないことは結構なことだ
とだ」

そりやそうでしょ、普通。

「私としては大いに邪魔してほしかったが」

「…はい？」

「何でもない。それより今日呼び出した要件だが」

私に一振りの軍刀を差し出した。

「持っていけ。餞別だ」

私は久々に剣を手にした。

「なぜ、これを？」

「内乱が終結したとはいえまだ治安が悪いからな。持っていて損はない
だろう」

私は剣を抜いた。

カタナに負けるとも劣らない名剣だ。刃の上部には紋様が彫刻さ
れている。

「こんな高価なものを…」

「私が貰ったものだが正直持て余していたからな。一向に構わんよ」

そう言って立ち上がった。

「どこへ行こうと君の自由だ。ただし、アメストリスに弓引く行為に
はしるなら…」

「信用してもらえるかはわからないけど…その気はないわ」

振り返ってふつと笑う。

「…信用しよう。今はな」

立ち去ろうとする少佐に声をかける。

「そういうえば一つ聞きたかったんだけど」

「…何かね？」

「何故私を助けたの？」

少し困った顔をしながら。

「…それはヒューズと同じ理由だろうよ」と答えた。

私は苦笑しながら立ち上がり。

「マスタング。一応あなたは私の命の恩人。この借り、必ず還します」マスタングは背中を見せてから。

「…期待させてもらおう。では、良い旅を」去っていった。

そして6月1日。

私が旅立つ日。

結婚式が近づいて多忙なはずのヒューズとグレイシアさんが無理して見送りに来てくれた。

「これ汽車のなかで食べて」

グレイシアさんが包みをくれた。

「これは？」

「アップルパイよ」

とても良い匂いがする。

「…ありがとう」

ヒューズが話しかけてくる。

「達者でな、ルージュ」

「ヒューズ…さんもお幸せに」

私も笑って返す。

ルージュというのは私の新しい名前。

スー・モヌウフは死んだことになっている。それでヒューズが私にアメストリスの戸籍を用意してくれた。そのときに私の希望でこの名前になった。

ルージュ。意味は赤。私が失った色だから。

「セントラルに来たら顔を見せなさいよ」

「じゃあな」

ヒューズに手を振り、歩き出す。

その時、思い出して尋ねた。

「そういえばヒューズ。どうして私を助けてくれたんですか？」

それを聞いて苦い顔をするヒューズ。グレイシアさんはクスクス笑っている。

ヒューズは頭を掻いて困ってるみたい。代わりにグレイシアさんが答えてくれた。

「それはね。お人好しだからよ」

遙か東方から伝わったモノノフの血。

この地で悲惨な結末を迎えつつあるイシユヴァールの血。

そして：憎むべきアメストリスの血。

それらが脈々と流れる私は：何人なのだろうか。

私の中の黒々とした憎しみはまだ消えていない。

それは私に囁き続ける。

復讐を。

だけどロックベル先生やグレイシアさんとの交流がそれを阻害する。

だけどここの憎しみが私の生きる糧。

ずっとずっと心の葛藤を抱き。

ひとつの目標を見出す。

それは。

ブラッドレイを殺すこと。

私はまた鮮血の道を歩き出す。

決して救われることのない闇を進む。

私はここに：イシユヴァアの教えを捨てる。

助けてもくれない神に縋るくらいなら。

この手を血に染める。

セントラル発の汽車に乗るとき。
仲良く走るアメストリス人の兄弟とすれ違う。

…彼らには私と正反対の未来があることを…。

外伝 鮮血の道標
外伝 一話 祈り

線路を走る振動がこんなに心地よいものとは思わなかった。
セントラルから乗車してから現在、全く汽車に飽きない私は…まだ子供なのだろうか。

私はいま東部へ向かっている。

東部なんて言うのと頭に浮かばないわけがない…イシユヴァール。いまはアメストリスによって完全に閉鎖されているらしい。

全てあの時のまま…いま聖地は静かに眠りにについている。

そんな複雑な思いを振り払って窓を開ける。

機関車の黒煙の向こうに目的地が見えている。

ロックベル先生の出身地、そして眠る場所。

リゼンプール。

「リゼンプール、リゼンプールだよっと」

なんかやる気を感じられない駅員の声を聞きながら駅構内を見回す。

(ロックベル先生のお墓って…どこだろう)

とりあえず駅長さんらしい女性を見つけて道を訪ねる。

「そこでしたら…」

紙に詳しく道を書いてもらう。

「ありがとう」

歩きだそうとすると。

「あ、待って…ロックベル先生の実家はご存知？」

と声をかけられた。

これも巡り合わせ…か。

墓場よりは近い、ということなので先にいくことにした。

二階建てのこぎつぱりした家の前に黒い犬が寝ている。説明された通りだから…ここよね。

へえ、ロックベル先生の実家って義肢装具師なんだ。

「わうつ」

黒い犬の歓迎(?)を受けながらドアをノックした。
軍刀で犬と距離をとる…犬って苦手。

「はいはい…お客さんかね」

喋りながら出てきたのは小さいおばあちゃんだった。

「あ、はじめまして…ロックベル…さんのお宅ですよ？」

「ああ、そうだよ…見たところ義肢が必要そうには見えないが…何の用だい」

「そうかい、イシユヴァールでね…」

ピナコさん(サラさんの義理のお母さんみたい)に案内されてお墓に向かっている。

一応イシユヴァール人だとは言えないので

「内戦に巻き込まれて怪我した時に治療してもらった」と説明した。

「はい…噂で亡くなられたと聞きましたので」

…実際は違う。私は助けることができなかった。

でも、言えない…。

「酷い…戦いだったからね」

ピナコさんの言葉で戦場になった聖地が過る。

「はい…酷い…とても酷い…戦いだった…」

思わず涙が…やば…。

「…あんたも辛かったんだね」

なんとか堪えて。

「はい…でも大丈夫。うん、大丈夫」

良かった。笑顔で答えられた。

2つ並んだ墓石。

いまはどんな気持ちで眠っているのだろうか。

「親より先に逝くなんてね。とんでもない親不孝者だよ」

ピナコさんの呟きを聞きながら私は屈む。

片方しかない瞳を閉じて静かに花束を捧げた。

(ありがとう、ロックベル先生)

ただただ、感謝。

「もう行くのかい」

「はい、汽車がでちやいますから」

「泊まっていかないかい？」

思わぬ申し出に少し戸惑いながらも。

「…ありがとう。でも、急ぐから」

「…そうかい」

少し残念そうなピナコさんに心が痛む。

「また来たら寄りなよ」

振り返って笑う。

「はい、ありがとう！」

「…やれやれ、そんなに急ぐ必要もないだろうに」

久々に賑やかな夕食になるかと期待したんだが、仕方ないね。

「ぼっちゃん」

「ウインリイ、お帰り」

「…お客さんだったの？」

あの子…ルージュと名乗った娘さんの後ろ姿を見送りながら。

「そっだよ…」

夕飯の準備の為に家へと戻った。

外伝 二話 戦友

随分旅をしてきたと思う。

決意した復讐を果たす為の旅。

復讐に必要な情報はできる限り集めたかった。

その為に闇を選んだ。

闇を歩く、ということとは生半可なことではない。

仲間に裏切られたことは何度もあった。命の危機なんてザラだった。

女としてのプライドを踏みにじられたことは数えきれない。

女であることは武器にもなり、弱点にもなり得ることは嫌というほど学んだ。

…私はもう…。

光溢れる場所へは戻れないだろう…。

そんななかでも信頼しあえる戦友とも出会えた。

そう、もつとも信頼しあえた戦友…。

あれはイシユヴァール殲滅戦から3年ほど過ぎた頃。

ダブリス近くの闇市場で始末屋をしていた時のことだ。

仕事の付き合いから親しくなったマーテルと飲んでいた。

私たちは組織の裏切り者の後始末を済ませた帰りにダブリスのメインストリートから少しはずれた場所にあるバーに繰り出した。

ただでさえ血生臭い仕事の後だ。酒はいつも以上に進んだ。

「マーテル、元軍人なんだ」

「まあね。結構いいトコまでいったのよ」

「アメストリス軍…だったのね。」

「…へー…てことは…イシユヴァールにも…?」

「ぎーんねん…私は南部戦線にいたからイシユヴァールには行ってないわ」

少しホツとした。

「ルージュはどここの戦線にいたの？」
「え？」

「あんた程の使い手がそうそういるわけないよ」
「うーん…こういう会話は想定してなかったわ…」

「あー…えと…シンに。シンにいたの」
「シン？」

「そう、シン。あっちの王族の警護なんかを…」

「ふーん。随分と修羅場潜ってるみたいだったけど…警護ねえ…」

「あはは…シンも結構血生臭いから」
「ニヤリと意味ありげに笑って。」

「そういうことにしといてあげるわ」

「そういつて私の過去をネタにし始めた。」

「主に、男のことを。」

「…この日、私は初めて記憶を無くすまで飲んだ。
うーん…」

「あたりが明るい。」

「…」

「頭痛い…」

「…」

「…寒。」

「目を開くと、そこは見慣れた天井。」

「よく泊まるマーテルの部屋の天井。」

「私酔い潰れちゃったのかな？」

「マーテル…ゴメン、水ちようだーい」

「起き上がって気づく。私なんにも着てないじゃない。」

「吐いちゃったのかな？」

「マーテル？」

「とりあえず着るものを探して部屋を出ると。」

「……………」

「……………」

「大きいのと、小さいのがいた。」

思わず問答無用で張り倒した男2人。よく聞けばマーテルの仲間だったみたい。

「イテテ…」

小さいほうが恨めしげに私を睨む。

「何よ…代価としても安いもんじゃない」

「そういう問題じゃねえんだよ!」

「まあ確かにいいも」「鈍牛は黙ってる!」
いいコンビみたい。

「よかったわねー、私だったらあんたら殺してたよ」

マーテルがケタケタ笑いながら茶々をいれる。

「ていうかあんたら何の用?」

「何の用って…マーテル、忘れてないか?」

「…?なんだっけ?」

「あのなあ…」

チラチラと私に視線を向ける小さいの。

…はいはい。わかりましたよ。

「私、外の空気吸ってくるわ」

そういつて席をはずした。

マーテルの部屋を出て屋上に向かう。

私はため息を吐いて軍刀に手をかける。

「何の用?おチビくん」

「チビ言うな!」

髪を逆立てて怒る。小さいほうだ。

「じゃあ何て呼べばいいの」

「…ドルチエツトだ」

「…ルージュよ」

屋上についてから握手を交わした。

階段登るときに散々足の長さを見せつけてやったからドルチエツトくん、ひきつった。

何も会話がないまま時間が過ぎる。

ドルチエツトは煙草を燻らせている。

私はさつきから気になっていたことを話した。

「いい剣ね」

「…んあ？」

「そのサーベルよ」

ドルチェットが腰にさしている剣。それはあまりにも「カタナ」に似ていた。

「ああ、これか。シンからの密輸品に紛れ込んだのさ」

傲慢気に「カタナ」を示す。

「不思議な剣だ。何をしても欠けもしない。今じゃ俺の大事な相棒だ」

「あんたさあ…イシユヴァールには？」

「?…いや、行ったことないが…」

私の…カタナじゃないか。

「それね、東洋の島国のサーベルよ。カタナっていうの」

「へー…カタナか」

私は少し笑ってドルチェットの顔を覗く。

「…?」

気のせいかもしれないけど…父さんに似てるかも。

「今度難しい仕事があるの。手伝ってくれない？」

それから私はドルチェットとよく仕事をしようになった。

深い仲にもなった。

しばらくして別れはした。けど、最高の戦友だった。

私がドルチェットとマーテルの死を知ったのは随分先の話だ。

…また、仇が増えた。

外伝 三話 同胞

最近、アメストリス国内で妙な事件が多発している。そんな情報を追っていた私の前には必ず軍の影があった。軍が動いているということは必ずアイツが絡んでいる…！ブラッドレイが…！

私はいま、北にきている。

軍の情報を追っているときにある男の釈放を耳にした。

その男は私の復讐対象の一人でもあった為、釈放は好都合だった。男を追って北上し…アメストリスの北限へ。

私は強国ドラクマとの国境に近い雪国、ノースシティにいた。砂漠で育った私にとっては雪は未知のものだった。

触ると熱いのではなく。触るとサラサラするわけでもなく。

冷たく私の手に乗り、消えていく。

なんて…怖い。

そして…寒い。

あー、感傷にひたってる場合じゃない。

マジで凍え死ぬ…！

夜の砂漠って意外と寒いものなんだけど。

この寒さはすごい。

はつきり言って甘くみてた。ちよつと軽装すぎたわ。

は、早く宿探して…暖まりたい…！

どこかに…ホテルないかしら…。

ガタガタと歯を鳴らしながら歩いていた私は小走りに走ってくる

軍人を見つけた。

く…！あんまり話したくはないけど…背に腹は変えられない！

「あ、すいませんー！」

声をかけた軍人は足を止めてくれた。

「…どうかしたのかね」

と言いながら私を一瞥して。

「…要は雪国を舐めてかかって凍えているのだな。ホテルを紹介しようか」

とつても優秀な軍人さんで助かったけど…なんか複雑だった。

「はー…」

軍人さんに紹介してもらったホテルで熱いコーヒーで一息。生き返った。

「明日は晴れるようだ。早めに防寒具を揃えなさい」

そう言われてから私は初めて気がついた。

黒い肌…白い髪…。

そして、あえてサングラスによって隠されている瞳…。

まさか…この人…。

「…何か？」

私は思わず。

「…同胞？」

と呟いてしまった。

やや驚いた感じもしたけど、それでも冷静に。

「同胞…などと言う呼び方をするということは…君も…」

そしてため息をついて。

「そうか…生きていたのか」

…！

まずい！

思わず軍刀に手をかける。

その反応よりやや遅く銃に手をのばす。

そのまま止まる。

……。

この状態なら私の方が速い。

けど今は騒ぎを起こしたくない。

なら…賭けてみよう。

「私は生きています。そしてまだ生きていたい」

「……………」

「あなた方ブリッグズに迷惑をかけることは絶対しないから」

しばらくの間が過ぎ。

「口ではなんとも言えるものだ」と返される。

「なら私の…イシユヴァールの血にかけても…誓います」

これならどうだ。

……………。

そして。

軍人さんが吹き出して氷の時間は終結した。

「いや、すまない。まさか君自らイシユヴァール人だと名乗るとは思わなかった」

カツと頬が紅潮したのが自分でもわかった。

なんて間抜けなことしてんのよ私…！

「生憎私は久々の休暇なのでね。あまり面倒事には関わりたくないんだよ」

半分顔が笑っている。本当に休暇なんだか…。

「見逃してくれることは感謝します」

「気にするな。これ以上同胞が血を流すのは耐えられない」

その言葉のときだけ笑顔が消えたのが印象的だった。

ホテルの玄関で軍人さんを見送るとき。

「すいません、お名前は…」

と聞きかけて。

「あ、私はルージユと言います…今は」

と言葉を繋げた。

すると軍人さんはまた苦笑しつつ。

「…マイルズだ」

と言って去っていった。

翌日。

しっかりと防寒具を購入し私は追跡を再開した。

そう。

イシユヴァール人を最も多く殺害した錬金術師キンブリー。

最近の奇妙な事件に関わり続ける錬金術師エルリック兄弟。
私が追っているのはこの三人だ。

外伝 四話 信頼と約束

数年前のことだ。

私はある麻薬組織の用心棒として働いていた。

アメリクス国内では流通していない安価な麻薬を調達するためにクレタとの国境に来たときのことだった。

アメリクスとクレタとの国境には巨大な峡谷が広がっている。

その峡谷にある妙な街、テーブルシティ。その下の谷底に広がる貧民街が取引の場所だった。

(ひどい臭い…)

イシユヴァール人のスラム街でもここまでひどい場所はない。

昼夜を問わず上空から降ってくるゴミ。それがこの住人の命を脅かし…住人の糧となる。

(ゴミの山を漁る子供達か…)

何か金目の物のがないか探してまわる住人。私には彼らが同じにしか見えなかった。

必死に明日へと命を繋ぐイシユヴァール人と…。

クレタの秘密警察の気配はない。

取引も無事に終了したようだ。

(今回は楽な仕事だったわ)

血を流すことがなければそれはそれで良いことだ。

早く帰って一杯飲みたいな…。

ピー…。

…笛？

秘密警察が今頃嗅ぎ付けたか。

ふん。もう遅いわ。

さて、さっさと引き上げて…。

ターン！ターン！

…？

こつちじゃない…。

「逃げろー！秘密警察だー！」

「まずい！見つかったわ！」

「ジュリア、こっちだ！」

ミランダに手を引かれて階段を駆け上がる。

ターン！ターン！

銃声！

キヤアア…。

あの声は！皆が！

「！」

私はミランダの手を振り払って戻った。

「ジュリアー！戻りなさい！」

ミランダの声を無視して駆け戻る。

階段を下りて角を曲がると。

「…!!」

血を流して倒れてる仲間と。

下卑た笑いを浮かべたクレタ兵がいる。

「!!」

私は声が出せなかった。

その間にクレタ兵の銃が私に向けられる。

引き金が引かれる。

その時。

銀色の閃光が数本煌めき。

クレタ兵は何が起きたかわからない顔でバラバラになった。

「大丈夫？」

その声の主を見上げると。

アメストリス人の女性が立っていた。

「ジュリアを助けてくれたことは礼を言うわ」

ミランダは銃を構えたままアメストリス人の女性と距離をとる。

「ミランダ…この人は…」

私が何か言おうとするとアメストリス人の女性が何かを呟いた。

聞いたことのない言葉だった。

けどそれを聞いたミランダの表情が変わった。

「それはイシュヴァールの…」

それがアメリストリス人の女性…ルージュとの出会いだった。

それから半年ほどしてから、ルージュはまたやって来た。

数人のイシュヴァール人と一緒に来たルージュはミランダ達と何か話していた。

そして皆、喜んだ。

どうやら武器が格安で手に入るルートが見つかったらしいかった。これでまともに戦うことができる、て皆大騒ぎだ。

そんな喧騒のなか、私はルージュと直接話をする機会があった。

「あら…ジュリア…だっけ」

私は無言で頷く。

それからポツポツと会話を交わし。

私は一番の疑問をぶつけてみた。

「なんで私達にこんなによくしてくれたの」

ルージュはそれを聞いて少し悲しい顔をした。

そして。

「抵抗することができる貴方達が…羨ましいから…かな」

と呟いた。

そして私とルージュは友達になった。

「もしジュリアが助けが必要になったら、私は必ず駆けつけるわ」

そういつてルージュは谷から去っていった。

私は新聞を見ていた。

『テールブルシテイにて反乱が発生』

『犯行は反政府組織【黒蝙蝠】が関与か』

『テールブルシテイは占領され、新生国家ミロス建国を宣言』

…ジュリア、やったわね。

私は新聞をゴミ箱に捨てると、歩きだした。

全ての決着の場、セントラルへと。

終章 涯てにあるモノ 第一話 約束の日

もうすぐ日食が見られるらしい。

世界的に見れば珍しい現象ではない。だけどアメストリスで見られるのはかなり久しぶりみたいだ。

しかも皆既日食。今回見逃せば一生見られないだろう。

天体なんてものにほとんど興味が無い私でも胸が踊る。

……。

できれば……。

イシユヴァールの地で見たかった……。

血生臭い日々とも少しだけお別れ。

今回の皆既日食はセントラル付近が一番よく見える……という噂を信じ、私は久々にセントラルへと足を向けた。

ヒューズさんの墓参りに半年ほど前に来て以来だ。

……グレイシアさんとは……会ってない……。

会えない……ていうか……今の私は……見せられない。

グレイシアさんは光の中にいるべき人。闇にまみれた私には……眩しすぎる。

せつかく息抜きにきたはずのセントラルは私に重い現実しか与えてくれなかった。

……やっぱり郊外でみよう。

「スー……」

その時。

捨てたはずの名前を呼ぶ声が聞こえた。

私は腰の軍刀に手をかけ間合いをとる。

「!!」

背後にも気配を感じた私は振り向きがてら居合を放つ！

ギイン！

金属がぶつかる音が響く。

「待テ」

なんだか聞き覚えがある声。

ポニーテールの女が私の刃を防いでいた。

機械鎧の腕が私の軍刀を握る。

「私だヨ、私」

妙な訛りの女の顔が私の記憶と一致した。

「…ランファン…」

イシユヴァール殲滅戦以来の久々の再会だった。

できれば酒場で酒を酌み交わしたい。そんな想いから誘ってみたけど。

「……………イヤ」

人見知りのランファンにはやっぱり拒絶された。

「変わってないわね、ランファン」

人がいない裏通り。

崩壊しかけた家の屋上で話すことにした。

「スー、あなたの噂は聴いてル」

「…あんまりいい噂じゃないんでしょ」

ランファンは視線をまっすぐ私に向けた。珍しい。

「今はそんなことはいい。話を聴いテ」

「ハイハイ…だから何よ」

「私と来てほしイ」

ランファンたちが泊まる宿に向かいながらこれまでの経緯を聞いた。

「……………」

「スーの力が欲しい。お願い、手を借りたイ」

「ちよ、ちよつと待って。ちよつと待ってよ！」

私は頭を振る。

「ホムンクルス？お父様？何を言ってるの？」

「信じられないのはわかる。けど信じてほしイ」

正直、ランファンに担がれてる気がして仕方ない。

だけどランファンはそんなことする娘じゃない。

いや、だけどこんな突拍子もない話……。でもランファンは……。

あ〜もう！ワケわかんない！

「スー、いい？あなたの目的も果たせル」

少し混乱がおさまった私にランファンが言った。

…目的？

「今回の件には間違いなく軍上層部がからんでル」

「…軍…上層部？」

…。

目的…。

…。

キング・ブラッドレイ…！

「…私はランファンが言ってることは信じることはできない」

ランファンが俯く。

「スー…お願い…」

私は…昔の私じゃない。

「ランファンが何をしようと思ったことじゃない」

私は一度言葉を切り、息を吸い込む。

「私の目的はただ一つ…キング・ブラッドレイの首よ！」

そして歩き出す。

「ランファン…私ができることはそれだけよ」

「スー…それでもいい。私たちは…仲間ダ」

第二話 相棒

ランファンと別れた私はすぐに準備に取り掛かった。相手はキング・ブラッドレイ。アメストリスの最高指導者でありながら、おそらくは最強の剣客。

そして「お父様」と呼ばれる黒幕。その配下のホムンクルス。どれだけ準備しても足りないかもしれない。だけどやるしかない。必要と思えるものは全て揃えよう。

私は知り合いの非合法の武器商人の元へ急いだ。手投げ用のナイフ。

シン製の爆薬。

即効性の猛毒。

予備の軍刀。

いままで稼いだお金の大半を注ぎ込む。

もう時間がない。相場なんて無視で上等なものを買ひ漁る。

大体の手配を終えた私は次の準備を始めた。

準備とはいっても簡単だ。単なる人探し。

闇ルートの情報屋に大金を渡したらすんなりと居場所を教えてください。

小一時間早足で歩いてセントラルの郊外にでる。

城壁を囲むように並ぶスラムの一角。他の小屋よりはやや大きな造りの建物に汚い字で「BAR」と書かれていた。

その酒場に入り、奥の酒樽の上に視線を向ける。

…いた。

とりあえずグースカ寝てるそいつの頭に軍刀の鞘をおもいつきり振り下ろした。

酒樽から落ちて転がり回るそいつの背中を踏む。

相当痛かったのだらう。半泣きの状態で私を睨んだ。

「…何しやがる！」

その時の私は随分と目付きが悪かったと思う。

でも仕方ないじゃない。

この馬鹿のせいなんだから。

「何しやがる、じゃないわよ。なんであんたがここにいるのよ、イリージャ！」

イリージャ。

イシユヴァール殲滅戦のときに私が守っていた悪ガキ。

そして…私を守ってくれた悪ガキ。

戦後、しばらくはクセルクセス遺跡のスラムにいたらしいけどすぐに飛び出したらしい。

それからは私と似たり寄つたりの生活をしていたようだ。

「スー姉」

また鞆を振り下ろす。

「痛え！」

「その名前で呼ばないの！」

「わかったよ…」

イリージャは頭を押さえつつ。

「で？何の用だよ」

私はイリージャの横に立て掛けられた銃を見ながら。

「それ、玩具じゃないわよね？」

「あつたり前だつーの！」

その子供っぽい反応に思わずニンマリしてしまう。

こいつ、昔と変わってないわ。

情報屋の話ではイリージャの射撃の腕は確からしい。

さすがに「鷹の目」には及ばないらしいけど。

「イリージャ、あんたを一人前の戦士と見込んで依頼するわ」

「な、何だよ？いきなり」

「私と手を組んで」

「は？」

「ある男を殺したいの。ただ相手は強大なの。私一人では…まず勝てない」

イリージャは銃を手元に寄せて構えた。

「スー…じゃなくてルージユでも勝てない相手？そんなのいるのか」

構えた銃を窓の外に向ける。

「いるわ」

じつと照準をあわせる。

「イシユヴァール人にとって最強最悪の相手が」

轟音と共に火を吹くイリージャの銃。

こちらを注視していたアメストリスの秘密警察らしき奴に当たった。

「…まさか」

「キング・ブラッドレイよ」

外に出ると男が一人踞っていた。

腹に命中したのだろう。大量の血を流していた。

「さて。テメエは何者だ？誰の差し金だ？」

イリージャが凄む。私から見ると迫力の欠片もないように見えるけど大丈夫かしら？

「…イシユヴァールの負け犬が。吠えろ吠えろ」

「…あ？」

イリージャの表情が消えた。

「お前らみたいな負け犬はおとなくぎやあああ！」

イリージャが殴りかかるより速く。

私の軍刀が男の舌を切断していた。

「何か喋りたい？」

大量の血を吐きながら何かを訴えている…みたい。

「無駄なことしか話せない舌ならいらなしかと思つて…悪いことしちゃつたわね」

まだ何か訴えている…もういいや。

「ついでに死になさい」

今度は脳天に軍刀を叩きこんだ。

血を振り払つて軍刀をおさめる。

「どうする？あんたももう巻き込んだみたみただけど」

「…ああ。そうみたいだな…」

空を見上げてからイリージャは。

「いいぜ。組んでやるよ」

不敵に笑った。

「…よろしく」

…駄目だ。

イリージャ見てると笑えてくる。

背伸びしてるようにしか見えない。

第三話 前日

ランファンから聞いていた「約束の日」は明日だ。

あれからイリージャと共に入念に準備を進めた。

あれからはアメストリス側に気付かれることなく来れた…と思う。

た：話に聞く「お父様」の存在が本当だったとすると…隠しきれ
るわけではない。

それだけに相手の反応の無さが余計に不気味だった。

「…これで終わりにしましょう」

汗を拭いながら私はイリージャに言った。

「まあ、フォーメーションはこれしかないだろうしな。明日に備えて
早めに切り上げるか」

木の上から飛び降りてからイリージャが答えた。

水を飲みながら私は歩き始める。

「私、これから行くところがあるんだけど…あんたはどうする？」
隣を歩くイリージャは少し考えてから。

「…俺はパス」

と言って反対の道へ行ってしまった。

「…気を使わせちゃったわね」

苦笑しながら先を急いだ。

私は軍の墓地へ来ている。

当然、あの人に会う為だ。

「久しぶり…ヒューズさん」

持ってきた花束を置く。

しゃがみこんで私は黙祷を捧げる。

「私…明日で全ての決着をつけるわ。生き残れることは…ないと思
う」

立ち上がって空を見上げる。

「もしもヒューズさんのところに行くことになったら…今度は戦わな
くてもいいよね」

久々に。本当に心から。

「その時はデートしよ」

…笑えたような気がした。

久々に主人に会いに来た気がする。

あの日から…胸に空いた大きな穴が塞がることはない。

まだ若いんだから…等と言われて再婚を勧められることもあるけど。そんな気は更々ない。

ぼんやりと考え事をしながら主人が眠る場所に来てみると。

「…」

最近では珍しく花束があつた。先客がいたみたい。

「…誰か…わかりませんが…ありがとうございます」
主人を忘れずにいてくれて。

次は近くの共同墓地。

隅のほうに草に覆われて誰も近寄らない区画がある。

伸びた雑草を刈り取りながら進む。

そこにただ石を乗せただけの粗末な墓があつた。

「久しぶり…おちびちゃんにへび女」

石にお酒をかける。

「一緒に酒飲んだのいつだったっけね…」

少し残つたお酒を飲み干す。

「多分…明日中にはそっちに行くわ。そしたら…」

少し間をおいて。

「また飲みましょう」

スー姉…じゃなくてルージュが去ってからしばらくして、俺は粗末な墓の前に立った。

「よう。確かスー…じゃなくてルージュの元彼と飲み友達だよな」

持ってきた度の強い酒を振りかける。

「悪いけどな、ルージュはまだそっちには行かせないよ」
酒を全部かけると空になった瓶を置いて花を飾る。

「すまんが今はこれで我慢してくれ。全部終わったら立派な墓を建てやるよ」

ついに、夜が明ける。

始まる。

約束の日が。

第四話 生きる理由と戦う理由

ダーン!

ブリッグズ兵の放った弾丸はブラッドレイには当たることにはなかつた。

「…よし」

しかし、ブリッグズ兵の銃声と重なるように放たれたイリージャの弾丸は見事にブラッドレイの肩に命中した。

そのままブラッドレイは堀へと落下していった。

「イリージャ、ありがとう」

私はイリージャにウインクすると空中へと身を踊らせた。

近づく水面を見つめながら。

「やっど…ブラッドレイを」

軍刀を握る手に力をいれる。

約束の日当日。

私はマスタングに再会した。

「…生きていたか」

「…おかげさまで」

そんな味気ない挨拶のあと、私はブラッドレイの情報を求めた。マスタングから聞いた情報は2つ。

東部への視察のこと。そして鉄道爆破による暗殺計画のこと。

(今から追つても間に合わない…)
でも。

(ブラッドレイがそれぐらいで死ぬかな…?)

もし、ブラッドレイが生き延びて。

向かうとしたら。

『お父様』のいる場所。

「…中央司令部にいくわ」

…私はマスタングと別れた。

去り際に何か言っていたような気がしたけど。

正直どうでもいい。

私はマスタングの恩に報いるために来た訳じゃないから。
ただ。

あの日に…イシユヴァールが終わったあの日に。

決着をつけるために私はここにいるんだから。

私はイリージャと共にブリッグズ兵に扮して中央司令部にまぎれ
こんだ。

正門にブラッドレイが現れたという話を聞いて急いで移動。

そして堀の壁にぶら下がっていたブラッドレイを発見したのだっ
た。

「ぶはあ！はあ！」

ギリギリのところまで水面に顔を出して空気を貪る。

ブラッドレイを追いかけて狭い水路に入ったまでは良かったんだ
けど。

途中で急な流れに体を持っていかれて…散々流された。

「はあ…はあ…」

とりあえず寝っ転がって息が落ち着くのを待つ。

しばらくすると。

バチャツ

近くで水音が聞こえてきた。

「！…」

握りっ放しだった軍刀の感触を確かめ。

立ち上がる。

通路をしばらく進むと。

全身びしょ濡れの男がたっていた。

両肩と腹部からの出血。

そしてこの鋭い眼光。

きつとイシユヴァールの渴いた大地を見下ろしていた眼光。
間違いない。

やっと。

やっと。

辿り着いた。

「おつかれのようね、大総統閣下」

「今度は…誰かね」

「スー・モヌーフと言えはわかるかしら」

「…イシュヴァールの亡霊といったところか」

「…敵討ちなんて殊勝なものじゃないわ」

「ならば、なぜ私の前に立ったのかね」

「簡単よ。自分の為。自分が…私が…イシュヴァール殲滅戦に決着をつけるため」

「それを敵討ちと言うのではないのか」

「…ふん。そうね。何でもいいわ。理由なんてどうでもいい」

「…」

「私が生きる為には…あなたを乗り越えないと駄目なのよ…」

「ふむ…生きる為、か」

「あなたを倒して…戦う理由を無くすことが…私には必要なのよ」

「そうかね…だが私にも生きる理由がある…」

『戦う理由』と『生きる理由』がぶつかる。

それは。

軍刀を抜いた。

第五話 もう一つの眼

最初に私が斬り込んでから、5分くらい過ぎたと思う。ほぼその5分で：勝敗はみえていた。

ブラッドレイは近くに落ちていた鉄パイプを拾って構えた。私は懐に忍ばせていたナイフを手にとって。

ブンツ

投げ渡す。

「…何のつもりかね」

「別に。負けた理由に武器の不備をあげられたくないから」

「大した自信だ」

「我ながら馬鹿だとは思わ。自分から不利な状況を造り出してるんだから」

「ほお：ちゃんと現状を理解している。だったら私には時間が無いことも理解しているかね？」

「まあ…ね」

「結構。ならば早々に決着をつけよう」

その言葉と同時に私は最大速度で斬りかかった。

ナイフで防がれて：その後がわからなかった。

気がついたら私は10メートル近く吹き飛ばされ。

左腕の首を砕かれていた。

「ぐうう…！」

必死に痛みを耐えながら立ち上がる。

完全に骨をやられた。

「良い反応だ。頭を砕いてやろうかと思ったが」

避けきれないと思って咄嗟に左腕を犠牲にしたみたい。

自分の反射神経に感謝すべきなんだけど：ダメかもしれない。

「まだ右腕があるわ！」

痛みで身体の動きが鈍っているのがわかる。それでも再び斬りつけた。

「…人はそれを蛮勇と呼ぶのだよ」

私の斬撃の倍以上速い鉄パイプが軍刀を弾き飛ばす。

再び私の頭を狙って振り下ろされた鉄パイプを今度は右手で払う。

そのまま薙ぎ飛ばされる。

今度は右手の指全部折れたっぽい。千切れなかったただけマシかもしれない。

だいたいここまでで5分。

勝機なんてものを見出だす間もなく私の負けが確定した。

「随分と呆気なかったな。最初の威勢はどこに行ったのかね」

「…何も…言い返せないわ」

「中々いい剣筋ではあった。私の眼をもつてしても一撃目を捌くのは冷や汗物だったよ」

ブラッドレイの…眼。

そうだ。あの眼だ。

フー爺さんの太刀筋すら見極めるあの…眼。

私にも…あの眼があれば…。

勝てたのに。

ブラッドレイを殺せたのに。

みんなの…仇を…恨みを…。

…畜生。

あの眼が…。

『見るのではない』

…？

『…感じるのだ』

…あ…。

『人が動けば空気も動く』

これは…フー爺さんが言ってた…。

『その流れを全身で感じるんじゃ』

全身で…感じる…。

そうだ。

見える必要はないんだ。

…感じるんだ。

「む…まだ立つか」

私は立ち上がる。

何度でも。

「往生際が悪い」

転がっていた軍刀を蹴りあげる。

「もう終わりにするぞ」

落ちてきた軍刀の先を胸の谷間に滑り込ませる。

タイミングを合わせて体を引き。

「…死ね」

服を切り裂く。

と同時に。

ブラッドレイの斬撃が私の元居た空間を通り過ぎた。

床に刺さった軍刀を口で噛んで引き抜く。

そして再びブラッドレイの一撃を避ける。

バックステップをして一旦距離をあげる。

ブラッドレイはやや驚いた顔をしていた。

「…いきなり全裸になって私を誘惑するつもりかね？生憎私は既婚者
でね。妻を裏切る気は毛頭無いのだよ」

ブラッドレイの言葉すらも…空気の流れとして感じられる。

全身が眼になった気分だ。今なら…ブラッドレイの動きも…わか

る！

「…ふっ！」

再び走り出す。

ブラッドレイがナイフを逆手に持ちかえる。見ていたわけでもないのにわかる。

…いける！

「いい加減にしろ、時間の無駄だ！」

少し苛ついた感じでブラッドレイが鉄パイプを振る。

どこを狙っているか手にとるようにわかる。私はブラッドレイの攻撃を紙一重で見切る。

ブラッドレイの眼に驚きの色が広がる。

そして。

「…痛う！」

ほんの刹那。

ブラッドレイが傷の痛みによつて隙を生じる。

今！

今しかない！

私は啞えた軍刀を振り抜く。

「むっ！」

咄嗟に反応してナイフを防御にまわす。

でも私の斬撃はナイフを斬鉄し。

「ぐふあー！」

ブラッドレイの脇腹を薙いだ。

そのまま体を反転させ。

「…むう…」

背後からブラッドレイの首に軍刀を突きつけた。

ブラッドレイが鉄パイプとナイフを放す。

私は。

勝った。

第六話 一つの結末

確か：ルージユと言ったか。

私に勝ったイシュヴァール人は。

私に初めて土を着けたイシュヴァール人。

あれとの戦いは：いやはや、新鮮だった。

両腕を砕かれても立ち上がり、最後は口で軍刀を振り抜きおった。

首に刃物を突き付けられた時は：私でも「終わり」を感じた。

しかし。

あのイシュヴァール人は：そのまま倒れた。

：笑みを浮かべたまま。

死んだかどうかまでは確認していないが。

もし死んだとしたのなら：満足して逝ったのだろう。

それがとても羨ましく感じた。

だが。

私も。

満足して死ぬことができそうだ。

なんという因果だろうか。

あのイシュヴァール人と同じように。

両腕を失い。

軍刀を噛んで戦う蛮行を私が体験しようとは。

だが。

愚かだとは思わん。

とても。

：清々しい。

「：王たる者の伴侶とはそういう者だ」

私は自分で話している自覚はある。

しかし私の心は此処に無かった。

…死ぬ間際にしては浮わっている。

私の中にあるのは。

「む…」

私の最後に。

「くだらぬ問答をしているうちに敵を打ち損ねたな、娘よ」

真に望んだ戦い。

「用意されたレールの上の人生だったが」

その相手となった名も無きイシユヴァール人。

「おまえ達、人間のおかげで」

そして。

「まあ」

私の人生のなかで。

「最後の方は」

唯一。

「多少」

敗北を覚えてくれた。

「やりごたえのある」

あのイシユヴァール人。

「良い人生であったよ」

名は…。

「…」

確か…。

ルージユ…。

これが…満ち足りた…。

“死”か…。

…。

…。

…。

「…」

…う…。

「…い…」

…うう…。

「…いて…」

…手…手が…。

「…痛い！」

…あれ？

…??…。

「…生きてる？」

私…。

確か、ブラッドレイを追い詰めて…。

意識が途切れて。

「なんで？」

え？ええ？

理解できない。

普通、止め刺すでしょ!?

「…クソ！ふざけんな…痛」

痛いけど…追わなきゃ。

もう一度痛い思いをしながら立ち上がる。

「まってなさいよ…痛」

そして追いかけた。

明るい場所に出る。

そこにはランファンと、二人の倒れている男がいた。

一人はイシユヴァール人だ。顔が見えないけど…多分スカーかな。
もう一人は…。

…。

…クソ野郎！

「ランファン」

「ルージュ…」

「あなたが殺したの？」

ランファンはなぜか悲しげな顔を左右に振った。

「なんて言うか…時間切れみたいナ…」

時間切れ…ね。

あーあ。

本当に嫌なヤツ。

なんて満ち足りた顔してんのよ。

「あーあ…」

「ルージュ…なんで泣いてル？」

「…なんでだろね」

悔し涙、だよ。

クソ。

ホント、嫌なヤツ。